
ヒメミコ伝 鬼の復活

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒメミコ伝 鬼の復活

【Nコード】

N9890S

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

姫巫女流古神道の継承者である小野藍。彼女は思い悩んでいた。そんな藍の悩みなど無視するかのように、かつて先祖の小野楓が何とか封じた鬼が甦ろうとしていた。現代に現れた最強の陰陽師を藍は倒せるのか？

プロローグ 杉野森学園高等部仮校舎にて

辰野神教との壮絶な戦いから二ヶ月が過ぎた。季節はすっかり冬、もうすぐクリスマスだ。

太古の神との攻防で消滅した杉野森学園高等部はようやく仮校舎への移転が終わり、生徒達も学園側も、その生活が正常に戻りつつあった。

しかし、邪馬台国の昔から続く姫巫女流古神道の継承者にして、高等部の日本史の教師でもある小野藍は、校舎消失について酷く責任を感じたままだ。理事長の安本浩一にも、事務長の原田裕二にも、「気にしないように」

とは言われたが、それでも何もなかったかのように普通の顔をして通勤できない。

（一体何人の人達に迷惑をかけたのだろうか？ 受験生である三年生は、大丈夫だろうか？）

真面目な藍らしい反応だ。しかし、高等部が消失して、藍の事を責める生徒はいないし、保護者もいなかった。それは全て、安本理事長と原田事務長の迅速な対応があったからだ。

（もう一生頭が上がらないなあ、理事長と事務長には）

藍は本気でそう思った。

それでも、落ち込んでばかりいられないのが、教育者だ。藍はプレッシャーを感じながらも、学園に行く。バイクを駐車場に停め、できるだけ目立たないように校舎の壁伝い^{かべつた}を歩くが、彼女を知っている生徒にはそんな事は無駄な足掻きだ。

「おはようございます」

まるで待ち伏せをしていたかのように、藍が顧問を務める歴史研究部の三人娘である古田由加、江上波子、水野祐子が目の前に現れる。お揃いのチェック地のマフラーは学園指定のものだ。

「お、おはよう」

藍はビクツとしたが、何とか笑顔で挨拶を返した。するとそれに気づいた祐子が、

「先生、そんなにビクビクしなくてもいいんですよ。先生は学園を救ってくれたんですから」

と、いつものように余計な一言を口にする。

「え？」

ドキツとしてしまう藍。由加と波子が慌ててお喋りな祐子の口を塞ぐ。

「ふごふご」

「失礼しましたあ」

二人は太めの祐子を引き摺るようにして駆け去った。

「あの子達に励まされるなんて、何だか……」

藍は自嘲気味に三人を見送り、職員専用の玄関へと歩き出す。

「おはようございます、小野先生」

後ろから声をかけられ、

（一番会いたくない人に……）

と思いながらも、藍は笑顔を瞬時に作り、振り返る。相変わらず「私可愛いでしょ光線」出しまくってるな、と思ってしまう高等部の英語担当の武光麻弥たけみつ まみが立っている。彼女が巻いているマフラーは、外国の高級ブランドのものだろうが、ブランド品に一切興味が無い藍には、それがどの国の何というブランドなのか、全くわからない。只、

（高そうなマフラーだな。白い狐？）

と思うくらいだ。

「おはようございます、武光先生」

作り笑顔をバッチリ決め、挨拶を返す。すると麻弥は、

「放課後、お時間いただけませんか？ お話したい事があるんです」

「え？」

何の話？ 藍はドキドキした。

「私の剣志郎さんに近づかないで下さい」

それはないか。ここのところ、お互いに全然話もしてないし。では、何？

「お願いしますね、小野先生」

麻弥は、藍の返事を聞かずにサッサと歩き出してしまおう。

（マイペースね、麻弥先生は）

藍は肩を竦めた。そして、歩き出しながら、もう一度考える。

（わからない。何だろう？）

思わず首を傾げてしまった。

「首、痛いのか？」

突然後ろからそう言われ、

「きゃっ！」

と柄にもない悲鳴を上げてしまう。ムツとして振り返ると、思ったとおりそこにいたのは、竜神剣志郎だった。すると、更に腹が立つ事に、剣志郎はクスクス笑っている。

「全然似合っていないぞ、さっきの悲鳴」

「うるさいわね！ 貴方が急に声をかけたから、驚いたのよ！ 別に可愛く思われたくて叫んだんじゃないわ」

藍はプイと顔を背け、歩き出す。途端に剣志郎は「しまった」という顔をした。

「あ、いや、その、そんなつもりじゃなくてさ……」

「じゃあ、どんなつもりなのよ!？」

藍がいきなり振り返ったので、剣志郎は彼女に抱きつく格好で立ち止まった。

「生徒が見えますよ、お二人さん」

同僚の男性教師が苦笑いして通り過ぎた。他にもクスクス笑っている教師がいる。生徒達も遠巻きに二人を見て、ニヤニヤしていた。

「あ、悪い」

剣志郎は真っ赤になって藍から離れた。

「あ、私こそ、ごめん……」

藍も赤面して謝罪する。自分がいきなり立ち止まったのが悪いと

わかってるのだ。

「じゃ、急ぐから」

藍は恥ずかしさのあまり、駆け出した。剣志郎はそれを追いかける事もできず、

「あーあ」

と溜息を吐く。

小野神社。

千七百年以上の歴史を持つ古神道の神社。藍の祖父である小野仁齋が現在の宮司だ。藍がそのまま神社を継承する事も可能だが、仁齋としては、日本全国にある小野一門の分家から婿をとって欲しいのだ。無論、藍の気持ちがかつての許婚である小野雅にあり、剣志郎との縁も浅からぬ事も、仁齋は承知している。しかし、雅は邪法の黄泉路古神道よみじ こしんどうを会得し、一度は小野一門と袂を分かった身。故に宗家に迎え入れる訳にはいかない。そして、剣志郎は、その家が竜神を祀る神社の末裔だった。二人の個人的な相性がどうであれ、二つの家は結びつかない方が良く、それが仁齋の当面の結論だ。

（もはや、小野宗家も藍の代で終焉しても良いとも思うがな）

孫娘の幸せを考えると、そうも思ってしまう仁齋である。

「さてと」

広い境内をひととおり竹ぼうきで掃いた仁齋は、痛くなった腰を右手でポンポンと叩いた。

「む!？」

その時、おぞましい気を仁齋は感じた。

（まさか、あの社が？）

仁齋はほうきを放り出し、境内を走る。

「よもやそんな事が……」

彼は息を切らせて、境内を出ると、目の前の路地を右へと走った。
（何があった？ 結界が何故破れたのだ？）

明治の世を揺るがした鬼が、平成に甦ろうとしていた。

第一章 衝突事故

小野神社の前を通る路地を西に百メートルほど進むと、少し広い区道に出る。そこを右折し、北へ五十メートルほど進むと、道路が不自然に曲がっている場所がある。そこは、道路の真ん中に社がある。その社を避けるようにして、車線が二つになっているのだ。その社は、明治初期に建てられ、平成の現在までずっと、姫巫女流の小野宗家が守って来た。付近に住む人達も、それが何故なのかは忘れてしまっているが、守り続けて来た小野宗家の者達は覚えている。（よもや、あれが今になって破られるとは……）

小野宗家の現当主である小野仁斎は、息が切れるのも構わず、その社を目指して走っていた。

（このおぞましい気は、恐らく……）

仁斎は歯軋りしながらその社へと向かった。

山形県鶴岡市。

日本有数の修験場があるところである。その一角にある一人の修験者の屋敷。

「感じたか？」

山伏姿の老人が、飲みかけのお茶の入った茶碗を卓袱台に戻して言った。その向かいに座っている白装束を着て、前髪で片目を隠し、長い後ろ髪を束ねた若い男が眼光を鋭くする。

「ああ。何だ、これは？ 妖気とも神気ともつかない妙な気だ」

「そうだな。しかし、場所が問題だぞ」

老人が言う。若い男はスツと立ち上がり、

「例の社だな。しかし、何故今になって……」

「解せんな。とにかくも、仁斎が危うい。行ってくれ、雅」

老人は若い男、すなわち、小野藍の許婚であった小野雅^{おのみやび}を見上げる。

「言われるまでもない。あの男が出て来ようとしているのであれば、防がねばならない」

雅は老人を見下ろし、

「すぐに戻る。話の続きはそれからだ」

「ああ」

老人、修験者の遠野泉進^{とおのせんしん}は頷いて応じた。雅はフツと笑うと、スウツと消えた。彼の使う黄泉路^{よみじ}古神道^{こしんどう}の秘術で、根^ねの堅州国^{かたすくに}という異空間を使った移動術である。

「今頃になって、か。いや、今だからこそなのかも知れんぞ」

泉進は残りのお茶をグツと飲み干して呟く。

「建内宿禰^{たけしうちのすくね}が封じられ、巨大な光の神も消えた今だからこそ、彼奴^{あやつ}が動いたのだ」

泉進の言葉は謎めいていた。

仁斎が社のあるところまで辿り着くと、そこには野次馬が集まっていた。

「何と……」

仁斎は絶句した。道路の真ん中に建てられている社は、石の囲いで守られており、更にその内側に木の塀も建てられている。それほど頑丈ではないが、人が簡単に打ち壊せるものではない。

「これは一体……」

仁斎は目を見開いたまま、社に近づいた。社の石の囲いを突き破り、木の塀を打ち壊したばかりか、その奥にある社本体に突き刺さるように停止している大型トラックがあった。

「ああ、宮司」

近くの交番から来た制服警官が、仁斎の姿を見つけて近づく。他にも幾人かの制服警官がおり、野次馬達が社に近づくのを制止している。

「これは一体どういう事だね？」

仁斎は大型トラックを見上げて警官に尋ねる。警官は恐縮した様

子で、

「それが、私が来た時にはもうこの状態で……。運転席を確かめると、誰もおらんのですよ」

「逃げたのかね？」

仁斎が周囲を見渡して言う。しかし警官は首を横に振り、

「いえ。これだけの事故ですから、大きな音がしたんです。私もその音を聞きつけて来たんですが、我々より早く来ていた近所の方に確認しても、誰も運転している者を見ていないのですよ」

「何だって？」

仁斎は寒気がした。

（しかも、只単に事故を起こしたのではない。このトラック、意図的に社に突っ込んでいる。その上、結界を破っている。これはどういう事だ？）

「む？」

仁斎は、社に封じられている者の気配を感じた。

「いかん、早くこの場から離れるのだ」

仁斎が大声で言った。警官は仁斎の様子に驚き、

「どうしたんです、宮司？ 何かあったのですか？」

仁斎は、詳しく説明している暇はないと考え、

「危険なんだよ。野次馬連中はもちろんの事、近所の住民も避難させてくれ。一刻も早く！」

「しかし……」

警官は状況が理解できないせいで、仁斎の言葉を受け入れられないようだ。

「つべこべ言っとらんで、サッサと避難させろ！ 出ないと、死人が出るぞ」

「し、死人？」

その不吉な言葉に、ようやく警官はビクツとした。

「しかし、何と説明すればいいのですか？」

機転の利かない奴だ、と仁斎は心の中で思い、

「社の下に不発弾が見つかった、トラックが突っ込んだせいでいつ爆発するかわからん、とでも言え！ 早く！」

仁斎の剣幕に驚いた警官は、

「は、はい！」

と慌てて駆け出し、野次馬達にそれを伝える。野次馬達はたちまち、まさに蜘蛛の子を散らすようになくなった。

「後にご近所の方達だ。手分けして伝えなさい」

「は、はい！」

野次馬整理をしていた警官達が一斉に散らばり、辺りの家々に声をかけて回る。ほどなく、各家から住民が飛び出して来て、災害時の避難場所に指定されている近くの公民館に逃げ始めた。

「何とか間に合いそうか」

仁斎は住民の避難を見てホッとしたが、結界の破れ方が早くなつて来たのを感じ、社を見た。

「もはや結界を張り直す暇いとまもないか」

仁斎は齒軋こしりりした。

（伝承以上の気だ。まさかとは思うが、封じられながらも、力を蓄えていたのか？）

額に汗が滲む。

杉野森学園高等部の仮校舎で授業中の小野藍も、その異変を感じていた。

（何、この妙な気は？）

授業中ではあったが、それどころではないのを感じた藍は、

「自習にします」

と言うと、教室を飛び出した。生徒達は大喜びだ。普段ならそれを窘たしなめる藍だが、今はその余裕もない。

（お祖父ちゃん！）

彼女は祖父仁斎の危機を感じていた。そのまま一気に事務長室まで走る。

「どうしたのかね、小野先生？」

事務長の原田裕二が仰天して藍を見る。

「事務長、申し訳ありませんが、早退します」

藍はそう言って頭を下げると、仮校舎を飛び出した。

「ええ？」

いつもはあまり動じる事のない原田であるが、何が何だかわからないので、混乱していた。

「高天原に神留ります、天の鳥船神に申したまわく！」

藍はそこが学園の敷地内だという事も考えずに飛翔術を使い、飛び立つ。それほど緊急事態と感じているのだ。

「わわ！」

偶然、窓からその様子を目撃した古田由加は、久しぶりに見た飛翔する藍の姿に言葉を失った。

（すごい、小野先生……）

仁斎は社から噴き出す気が強まるのを感じ、

「君達も離れなさい。危険だ」

と警官達に告げた。警官達は顔を見合わせてから、駆け出す。

「来たか？」

仁斎は空を見上げた。社からまるで打ち上げられたかのように気の塊が現れた。

「あれか？」

空に浮かぶ人影。それが社に封じられていた者。

「百四十年ぶりか」

封じられていたのは、壮年の男。衣冠束帯姿で髪は総髪。

「貴様、土御門晴信か！？」

仁斎が男に向かって叫んだ。男はゆっくりと仁斎を見下ろし、

「お前は小野宗家の者か？ 如何にも。私は土御門晴信。小野一門を滅するために甦ったのだ」

と言い、ニヤリとした。

第二章 復讐の始まり

仁斎は空中に浮かぶ土御門晴信つちみかど はるのぶを睨む。

「小野一門を滅するためには甦よみがえっただど？」

晴信は仁斎を見据えたままでゆっくりと地面に降り立ち、

「お前達には積年の恨みがある。滅さずにはおかぬ」

と言うと、懷から幾枚もの呪符を取り出した。仁斎はそれに気づき、身構えた。

（何をするつもりだ？）

りんびょうとうしやかいじんれつぜんぎよう
「臨兵闘者皆陣列前行！」

晴信は九字を切り、呪符を投げた。呪符はまるで生き物のように宙を滑空し、仁斎に向かう。

「まずはお手並みを拝見致そう」

晴信は余裕の笑みで言う。

「愚弄しおって！」

仁斎は熱くなりそうなのを押さえながら、

「神劍、十拳じゅうけんの劍！」

と右手に光り輝く剣を出す。

「なるほど。流儀通りだな？」

晴信が呟いた。仁斎は晴信の何もかも見通したかのような言いように腹が立ったのか、

「姫巫女流は一人や二人の使い手を見たところで、その全てを見た事にはならぬぞ！」

と言い放つ。

「ならば見せてみよ、お前の力を！」

晴信はそう言って高笑いした。呪符は仁斎の近くまで来ると、彼を取り囲むように周囲を回り始めた。

「ぬ？」

仁斎は呪符の動きに気を配りながら、晴信からも目を離さない。

（これは囃か？）

呪符の動きが速くなる。すでにその速さは普通の人間には視認できない。

「急急如律令！」
きゅうきゅうりつりよう

晴信が更に次の呪符を放つ。

（あれが本命か！？）

仁斎は晴信が手から放った呪符が陰陽師が使役する物の怪「式神」しきかみであると判断した。

「はあ！」

仁斎は気合いを入れ、まず飛び回る呪符を一閃し、消し飛ばした。そして次に迫り来る呪符に向かう。呪符は黒い塊になり、鬼のような姿に変化した。へんげ

「やはり！」

仁斎は剣を下段に持ち、襲いかかって来る式神を斬った。

「ぐおお！」

一体が斬り裂かれて消滅すると、次が襲いかかる。

「えや！」

仁斎は二体目を右袈裟斬りにし、続く三体目を逆袈裟斬りで消した。

「もう終いか？」
しま

仁斎は剣を正眼に構え、晴信を見た。

「いや」

晴信はニヤリとした。

「何！？」

仁斎は完全に虚を突かれた。地中から式神が飛び出して来たのだ。

「おのれ！」

仁斎は辛うじてその襲撃をかわし、飛び退いた。

「よくぞかわした。それでこそ宗家。そして、あの小娘の末裔」

晴信は仁斎を嘲笑うかのように上体を反らせる。

「小娘？ 楓様の事か？」

仁斎は眉間に皺を寄せ、怒鳴った。

「その通り。そもそもはあの小娘が始まり。この私の目論見を邪魔しおって！」

ニヤニヤしていた晴信の顔が、明治初期の小野宗家継承者である楓の名前が出た途端、鬼の形相になった。

「逆恨みだな、土御門晴信。お前の企みが崩れたのは、楓様のせいではない」

仁斎は反論した。すると晴信は更に怒りを増幅させた。

「黙れ！ あの小娘が我が目論見を邪魔したのは紛れもなき事だ！」
仁斎には晴信の怒りの意味がわからない。

（こいつ、小野一門に恨みがあるというよりは、楓様個人に恨みがあるのか？）

「だから、あの女の血を引く者共は全て滅するのだ！」

晴信は残った式神を退かせ、別の呪符を出した。

「何だ？」

仁斎はその呪符から出る妖気を感じた。

（これはまさか……）

「これは先程の呪符とは違うぞ。私が新しく編み出した呪符だ。陰陽道の力と黄泉路古神道よみじ こしんどうの力を合わせた」

「何だと？」

晴信の言葉に、仁斎はギョツとした。

（黄泉路古神道の力を合わせたもの、だと？）

仁斎の額を汗が伝わった。

その頃、藍は仁斎達のところに向かって飛翔していた。

（お祖父ちゃん……）

小野源斎の時も、小山舞の時も、建内宿禰たけしうちのすくねの時も、ここまで焦った事がない。それほど藍は危機感を抱いていた。

「何が起きているの？」

藍は速度を増した。

仁斎はその呪符に底知れない何かを感じた。

（黄泉路古神道の記録の中には、陰陽道の呪符と合わせられたものの事は残っていない。どういふものなのだ？）

仁斎はジリジリと後退りした。

「怖い、小野の者よ？」

晴信はまた得意そうに笑う。

「そうであろうな。この術は、私以外誰も使わぬ。誰も使えぬからな」

晴信は呪符を放った。呪符は空を切り、仁斎に向かう。

「ぐわあ！」

呪符は式神に変化する。

「式神？」

仁斎は眉をひそめた。次に瞬間、式神に黄泉路古神道の術の一つである黄泉醜女あきしめが取り憑いた。

「……」

仁斎は啞然としてしまった。

（こ、これは……）

一瞬対応が遅れた仁斎を式神の鋭い爪が切る。

「ぐう！」

仁斎は右肩を切り裂かれ、後ろに飛ばされて倒れた。十拳の剣はその衝撃で遠くへ飛んでしまった。

「うおお！」

式神は雄叫びを上げた。その姿はおぞましいものだ。鬼のような身体が半分腐れ落ち、妖気を噴き出しているのだ。

「くう……」

仁斎は式神に切られた肩を押さえ、立ち上がるが、思うように身体が動かない。

「その爪には黄泉の妖気が含まれておる。やがてお前の身体は腐り、死ぬ」

晴信はそう言って大笑いした。

「……」

仁斎は肩を見た。切り裂かれた皮膚の下から、どす黒い膿が湧いて来ている。

（やはり、こやつ、昔より強くなっているのか？）

仁斎は齒軋りした。

「さてと。次の相手が迫っておるようだ。そろそろ死ぬか？」

晴信は狂気に満ちた目で仁斎を見下ろした。

「く……」

仁斎はふらつきながらも、投げ出してしまった剣の元に歩く。晴信はそれをニヤリとして見ている。

「そこまで辿り着けるかな？」

仁斎は途中でよろけて倒れてしまった。もう身体を起こす力も残っていない。

「うう……」

仁斎は顔だけを晴信に向け、その顔を睨む。

「終いだな、小野の者よ」

晴信が蔑みの目を向ける。

「やれ」

晴信の命で、式神が仁斎に突進した。

「ぐおおあ！」

式神の爪が仁斎に突き刺さるかと思った瞬間、その腕は斬り飛ばされ、宙に舞った。

「面白いものを作ったな」

漆黒の剣である黄泉剣を構え、仁斎と晴信の間に現れたのは、小野雅だった。

「ぐおお！」

腕を斬り飛ばされた式神が怒り、雅に突進した。しかし、雅はあっさりと式神を斬り捨て、消滅させた。

「貴様、黄泉路古神道の使い手か？」

晴信は訝しそうに尋ねた。雅はチラッと仁斎を見てから、

「そうだ。それがどうした？」

と尋ね返す。

「ならば、お前も滅する。黄泉路古神道も消えてなくなるべきものだからな」

晴信は雅を睨みつけた。

第三章 展開

小野雅はゆっくりと漆黒の剣である黄泉剣を下段に構える。

「噂に聞いた道を踏み外した陰陽師か？ 哀れだな」

雅は意図的に相手の神経を逆撫でする事を言った。

「道を外したのは、お前も同じであろう、小野雅よ」

土御門晴信は不敵な笑みを浮かべて言う。

「何？」

雅はギクツとした。「道を踏み外した」と言われた事に反応したのではない。自分の名を知っていた事に驚いたのだ。

「何故俺の名を知っている？」

雅は晴信を射るような目で見た。晴信はニヤリとし、

「私はここに封じられて後の事を全て知っている。日本が外国との戦を何度も経験し、最後に恐るべき炎で焼かれた事も、小野源齋が根の国から戻り、敗れた事も、豊国一神教なる邪教が豊公の御霊を使つて東京を滅そうとした事も、建内宿禰が現世に戻ろうとしてしくじった事もな」

雅は啞然としていた。

（ならばこいつは、自分の意志で戻って来たのか？ しかし、どうやって……）

「私の事はどうでも良い。さあ、お前の力を見せてみよ」

晴信はあくまで悠然と構えている。雅は舌打ちした。

（こいつの自信は何だ？ ハッターではない。どういう事だ？）

考えてみても仕方がないと判断した雅は、敢えて晴信の挑発に乗る事にした。

「ならば見せてやる。お前の黄泉路古神道がまだ入口で彷徨っている程度のものだという事をな」

雅は剣を地面に突き立て、

「黄泉醜女！」

と十指の全てから黄泉の化け物を繰り出した。

「黄泉醜女合わせ身！」

更にその十体を全部合体させる。

「黄泉醜女！」

続けて、再び黄泉醜女を十体出し、

「黄泉醜女合わせ身！」

と繰り返し、

「黄泉路古神道奥義、魔神霊憑衣！」

雅は黄泉の別の魔物を召喚し、黄泉剣に憑衣させた。

「行け！」

十体が合わさった巨大な黄泉醜女二体が同時に晴信に向かう。

「ほお、さすがだ」

晴信は袂から更に呪符を取り出す。

「そんな紙切れでどうにかできるようなものではないぞ、陰陽師！」

雅はそう言いながら、走り出す。黄泉醜女二体の攻撃の後、間髪入れずに斬りかかるつもりなのだ。

「それはどうかな？」

晴信はニツとして呪符を空中に投げる。呪符は式神しきがみに変化しへんげ、黄泉醜女に向かった。

「ぐおお！」

黄泉醜女一体に数体の式神が取りつく。

「ふおおお！」

黄泉醜女は取りついて来る式神を黄泉の妖気で溶かす。

「ぎぎぎ！」

式神は雄叫びを上げながら、消滅して行く。式神を消し去った黄泉醜女は晴信に向かう。

「終わりだ、陰陽師！」

その後を雅が走る。

「終わりはお前の魔物だ」

「何!？」

式神を消滅させたはずの黄泉醜女の中から、式神が飛び出て来た。そして黄泉醜女と融合し、突進を止める。

「何だと？」

雅はハッとして立ち止まった。二体の黄泉醜女は、式神に乗っ取られていた。

「ふぉぁぁ！」

スーッと雅の方を見る黄泉醜女二体。

「滅せ！」

晴信の号令で、二体の黄泉醜女が雅に襲いかかる。

「くそ！」

雅は後ろに飛び、剣を構えた。

「その剣で斬れるとは思えんがな！」

晴信が哀れむように言い放つ。雅は歯軋りした。

（確かに黄泉剣ではあれは斬れない……）

雅の額を汗が伝わる。

「雅……」

膿を噴き出す傷口を押さえ、仁斎が呟いた。

「ぬ？」

その時、晴信は、信じられない程の光の力を感じた。

「まさか……？」

彼にとっては悪夢の力である。

（小野、楓？）

晴信は思わず後ずさった。

「はぁぁ！」

空から舞い降りたその光の塊は、一瞬で二体の黄泉醜女を斬り裂き、消滅させてしまった。

「藍……」

仁斎がフツと笑った。雅は驚きを隠せない。

（また強くなったのか、藍？）

雅と晴信の間に降り立った藍は、強く光り輝き、二振りの剣を両

手にそれぞれ持っている。

「何者なの、貴方は？」

藍は晴信を睨みつけて尋ねた。晴信はようやく我に返り、
「そうか、お前が源斎と建内宿禰を打ち破った小野藍か？」

藍は自分の事をしっている晴信に眉をひそめた。

「私の事を知っているの？」

晴信は藍の面差しが楓に似ているのに気づいた。

「楓……」

一瞬懐かしさがこみ上げたが、すぐにそれを打ち消す。そして呪符を取り出そうとした時、彼は藍の後ろに二人の倭の女王を見た。

（何と！？）

晴信は驚愕した。

（まさか……。二人の天照大神様だと？）
あまてらすおおみかみ

晴信は啞然としてしまった。

（私の知らない姫巫女流がある……）

晴信は不利を悟った。

「おのれ……」

彼は躊躇う事なく、根の堅州国ねかたすくにに逃げ込んだ。

「え？」

藍は仰天した。

（何、今の？ 黄泉路古神道を使った……）

藍は訳がわからなくなりそうだった。

晴信は、根の堅州国を通り、かつて潜んでいた洞窟に行った。そこには、昔と変わらず、彼の作った呪符が残っている。誰も入り込めないように結界を張った森なのだ。

（姫巫女流、全て知っているつもりであったが、あの小娘は……）

晴信がかつて戦った小野楓も、姫巫女合わせ身は会得していたが、二人合わせ身を会得したのは藍が最初なのだ。晴信はそれだけ知らなかったのだ。

「だが、私は負けぬ」

晴信はギリギリと齒を軋ませ、両の拳を握りしめた。

藍は、雅の手を借り、仁斎を家まで運んでもらった。

「入っていいのか？」

仁斎を背負った雅が、藍の家の玄関で尋ねる。

「いいに決まってるでしょ！ 私じゃ、お祖父ちゃんを部屋まで運べないわよ」

藍はやや呆れ気味に答える。雅は苦笑いをして、玄関に入った。
(十五年ぶりか……。変わらないな、この家は)

雅は中を見回しながら、藍について奥へと進む。

「古くなったでしょ？ 雅がいた頃に比べて」

藍が言う。

「いや。全く変わらないように見える」

雅はお世辞でも嘘でもなく、そう思っていた。

「そうかなあ。もう建て直した方がいいと思うんだけどなあ」

藍は嬉しそうに言った。雅はその顔を見て、思わず笑った。

仁斎を布団に寝かせ、注連縄で結界を張り、黄泉の穢れを祓う祝詞を唱える。

「随分楽になった」

血色を取り戻した仁斎が言った。それを見て、藍はようやく安堵する。

「あの人は誰？ 何者なの？」

藍は早速仁斎に尋ねた。

仁斎の話は藍にとって驚くべきものだった。

明治初期、小野楓が宗家の仮の継承者であった頃、陰陽道の頂点である土御門家は明治維新の煽りを受け、衰退の道を歩み始めていた。その歩みに抗おうとしたのが、先程戦った土御門晴信である。晴信は神道系の宗派を怨み、呪符によってそのうちのいくつかを殲滅した。だが、楓と楓の許婚で、後に楓と夫婦となった耀斎、そし

て楓の跡を継ぎ、小野宗家を盛り立てた亮斎の力で晴信の野望を阻止し、時代の流れを受け入れた土御門家最後の当主である晴栄が封じた。そしてそこにそのまま社を建て、何重にも結界を張った。

「だとしたら、どうしてあの男は出て来られたの？」

藍は疑問を口にした。仁斎は頷き、

「そこなのだ。あの社に突っ込んだトラックに何かあると思う。調べてくれ、藍」

「ええ」

ふと気づくと、雅がいなくなっている。

「雅……」

寂しそうに呟く藍を見て、仁斎は心が痛む。

（藍、そろそろ気持ちを切り替えてくれ）

しかし、それを口にできない仁斎である。

第四章 罌の始まり

竜神剣志郎は一時限目の授業を終え、社会科教員室へ向かった。

「あれ、竜神先生はいるよ」

そんな声がある教室の前で聞こえた。何だと思い、立ち止まると、歴史研究部の三人組の一人である水野祐子が教室のドアを少しだけ開けて剣志郎を見ていた。

「いちゃ悪いか？」

剣志郎はすかさずドアを全開にして言った。

「ひ！」

祐子はまさか剣志郎に聞こえていたとは思っていなかったのか、驚いて尻餅を突いてしまった。

「あはは、すみません、竜神先生。深い意味はないんです、気にしないで下さい」

祐子を抱き起こしながら、三人組のリーダー気取りの古田由加が言い繕う。

（お前の言う事が一番信用できないんだよ）

剣志郎は訝しそうに由加を見下ろし、

「どうでもいいが、人の悪口は聞こえないように言え」と言うのと、また歩き出した。しかし、急に、

「竜神先生はいるよ」

の言葉が気にかかり、歩を戻す。

「さっきの言葉、どういう意味だ？」

剣志郎が戻って来るとは思わなかったのか、今度は祐子と由加が一緒に転けた。

「おい、大丈夫か？」

剣志郎が声をかけると、

「竜神先生、何も知らないんですか？」

三人組の最後の一人である江上波子が口を挟んだ。

「どういう事だ？」

剣志郎はキョトンとして波子を見た。すると、波子はトレードマ
ークの丸眼鏡をクイツと上げて、

「小野先生が早退したんですよ」

「え？」

剣志郎はあまりにも意外な話にビックリした。

（藍が早退？ 具合でも悪いのか？）

そして、朝の「事故」を思い出し、赤面する。

「どうして赤くなるんですか、竜神先生？」

波子がすかさず突っ込んだ。剣志郎はビクツとし、

「あ、赤くなんてなってないぞ」

と言うと、背を向けて逃げるように歩き出した。

その様子を、廊下の端でジッと見ている女子生徒がいた。

「小野先生はもうすぐ大変な事になるわ、竜神先生」

その女子生徒は、フツと笑うと、身を翻して廊下を歩いて行った。

噂の人物である藍は、トラックが突っ込んだ社の前に戻っていた。

近所の人達はまだ避難したままなので、周囲には人影はない。

（確かに、事故ではないわね。ブレーキを踏んだ形跡がないし、突
っ込んだ時には人は乗っていなかった。これは一体？）

藍は半ドアで閉じている運転側側のドアを開き、中を覗いた。

「これは……」

運転席の足元には、アクセルペダルとブレーキペダルに呪符らし
きものが張られていた。

（陰陽道のお札？）

藍はそのうちの一枚を剥がしてみた。

「わ！」

その途端、呪符はボウツと燃え上がり、消えてしまった。

「ここにも……」

目を上げると、ハンドルの裏側にも呪符が張られているのが見えた。

（これで遠隔操作したというの？ そんな事ができるの？）

藍はトラックの突っ込んでいる部分を見るために運転席から離れ、前に回り込む。

「え？」

トラックのバンパーから何かを感じた藍は、車体の下を覗き込んだ。

「ここにも……」

バンパーの裏側にも、たくさんの呪符が張られていた。

（これで結界を破ったのね？ でも一体誰が？）

この社に封じられていた土御門晴信つちみかど はるのぶにできる事ではない。

「社の事を知っている人間でないと、こんな事はできない。誰ができるの？」

藍が身体を起こして考え込んでいると、そこに戻って来た交番の警官が、

「藍さん」

と声をかけて来た。藍はハッとして振り返り、祖父である仁斎から言われていた事を思い出した。

「あ、おまわりさん、もう大丈夫です。ご近所の方に爆弾は処理したって伝えて下さい」

すると警官はホッとした顔で、

「わかりました」

と敬礼した後、

「本当は何があったんですか？」

小声で尋ねられ、藍は返事に窮したが、

「心配しなくて大丈夫ですよ」

と言って、会釈をするとその場を離れた。

「そうですか？」

警官は口ではそう言いながらも、不安そうに立ち去る藍を見送っ

た。

藍は家に戻ると、見知った事を仁斎に伝えた。

「そうか。それは危険だな。やはり、あの陰陽師には、協力者がいるようだ」

仁斎はゆっくりと起き上がりながら言った。

「大丈夫なの、お祖父ちゃん？」

藍が慌てて手を貸しながら言う。仁斎はムツとした顔で藍を見て、
「人を病人扱いするな！　ちょっと傷を負ったただけだ」

「はい」

藍はその剣幕に驚いて素直に返事をした。仁斎は腕組みをして、
「計画的なのが気にかかるな。それに何故あそこに奴が封じられているのを知っていたのか、そして、どうして結界を破れたのか。疑問点が多い」

「ええ。私ですら知らなかったのに、どうやって知ったのかしら？」

藍が首を傾げて言う、仁斎は藍を睨んで、

「さっきはうっかりしていたが、お前も知っていたはずだぞ。中学生になった時、社の事は教えたはずだ」

「え？」

その言葉に藍はギョツとした。

（そう言えば、そんな事を聞かされたような……）
苦笑いして誤摩化そうと思ったが、

「白々しい」

と仁斎に呆れられてしまった。頭を搔くしかない藍である。仁斎は
フンと鼻を鳴らしてから、

「それから、奴自身、封印が解けるのを待っていた節があるのだ。

奴は、『小野一門を滅するために甦った』と言いおった」

藍は目を見開いた。

「まさか、土御門晴信の手引きで、協力者が結界を破ったと言うの？」

「その可能性はある」

仁斎は眉間に皺を寄せて応じた。

そして、その土御門晴信は、奥多摩の森にある洞窟で、新しい呪符を作っていた。

（あの娘、楓の生まれ変わりか？　だとすれば、侮れぬ）

晴信は、藍の力を警戒していた。

（いずれにせよ、小野楓は私が乗り越えねばならぬ存在。楓の生まれ変わりであるあの娘を討ち果たし、私は小野楓を乗り越えるのだ）
晴信の目は血走っていた。そして、その呼気には、どす黒い妖気が含まれているのを、晴信自身、気づいていなかった。一度は心惹かれたはずの楓は、今では只の憎しみの対象でしかない。晴信は、自分では排除したと思っている建内宿禰たけしうちのみくねにまだ支配されているのだ。

剣志郎は、社会科教員室に戻ってからも、藍の早退が気になっていた。

（また何かあったのか、藍？）

二か月前の辰野神教との戦いを思い出し、剣志郎は背筋がゾツとした。

「また何もできないんだな、俺は」

彼は寂しそうに呟き、窓の外を見やった。

やがて、警察の現場検証が始まった。大型トラックはキーは付けられたままだったので、警官が運転して移動した。

「無人のトラックがサイドブレーキがかけられていなかったために動き出して、社に突っ込んだ。署の方では、そう処理する事になりました」

交番の警官が、検証作業を見守っていた藍に説明してくれた。

「それより、中とバンパーの裏に張られていたお札のようなもの、何なのでしょう？」

警官が藍に回答を求めるように尋ねる。藍は苦笑いして、

「さあ、何なのでしょうね？」

ととぼけた。すると警官は、

「本当に何も知らないんですか？」

「ええ、もちろん」

（本当の事を言っても、調書に残せないんでしょう？）

藍は心の中でそう思った。そして、家へと歩き出す。

「小野先生」

誰かが藍を呼んだ。

「はい？」

藍は誰だろうと思いつながら、声のした方を見た。そこには、剣志郎を遠くから見ていた女子生徒が立っていた。

「あら、本多さん。どうしたの？ 貴女、学校は？」

まだ二時限目が終わった頃だ。藍は変に思いつて尋ねた。すると本多と呼ばれた女子生徒は、

「怖いです！」

と言いつながら、藍に抱きついて来た。

「どうしたの、本多さん？」

藍はいきなり抱きつかれたので、混乱しながらも、本多に尋ねた。

「怖い夢を見るんです」

本多は妙な事を言い、泣き出してしまった。

第五章 本多晴子

藍は自分の胸にすがりついて泣く本多晴子を見た。

「とにかく、学園に戻りましょう。授業はまだ終わっていないんだから」

藍は晴子をスッと押し戻し、顔を覗き込んだ。彼女は杉野森学園高等部の三年で、藍の日本史を選択している。歴史研究部に所属していて、藍とは普通の生徒達以上に接する機会が多く、何かと相談相手にもなってきた。受験でも悩んでいたので、できるアドバイスもした。そのせいか、晴子は藍に好意を抱いており、休日は時々小野神社にも来ていた。

しかし、歴史研究部を退部し、受験に集中し始めたのか、六月以降はあまり藍に話しかけて来なくなった。奇しくも、藍が小野源斎と戦った頃から、晴子は藍から離れていったのだ。始めはそれを気にしていた藍だったが、授業ではいつもと同じく、積極的に質問をして来るし、廊下や校庭で顔を合わせれば挨拶をしてくれるので、
(考え過ぎね)

と割り切ったのだ。

「学園に戻るのが怖いんです。あそこに戻ると、変な男が現れて……。夢にまで出て来て……」

「変な男？」

晴子の思ってもみない話に、藍は眉をひそめた。

「わかった。じゃあ、神社に行きましょう。学園には、私から連絡しておくから」

「はい」

ようやく晴子は微笑んでくれた。藍はホッとして、晴子の肩を優しく抱くと、そのまま神社に向かって歩き出した。晴子が俯いて、ニヤリとしたのも気づかずに。更に、通りの角のブロック塀の陰から、目つきの鋭い角刈りで細身の背の高い男が二人を見ているのも、

藍は気づいていなかった。晴子はふとその男を見ると、右手で合図する。男はそれに頷き、姿を消した。

剣志郎は次の授業の準備をすませ、社会科教員室を出た。彼はまだ藍の事を気にしていた。

（何かあったのなら、以前は連絡してくれたのに）

そう思い、落ち込む。本当は藍が剣志郎にそんな連絡をした事はない。心配で仕方がない剣志郎自身が、藍に連絡をとったのだ。それなのに、彼の記憶は都合の良いように書き換えられていた。

（事務長だったら、何か知っているかな）

剣志郎は授業が終わったら、原田事務長に尋ねてみる事にした。そこまで藍の事が気になるなら、直接尋ねれば良いだろう、と事務長は言うかも知れない。しかし、それができない剣志郎である。

「ふう」

剣志郎は大きなため息を吐き、廊下を進んだ。

おの みやび
小野雅は、黄泉路古神道の移動手段である根の堅州国ね かたすくにを通り、土つちみかどはるのぶ
御門晴信を追跡していた。

（やはり、無理か）

雅は晴信の気を頼りに多摩山中まで来ていたが、それ以上は辿れなかった。

「結界を張っているのか」

雅は山を見渡し、呟く。根の堅州国は異空間である。そこには、黄泉路古神道を修得した者しか入れない。しかし、同じ黄泉路古神道の術者でも、別の術者と同じ根の堅州国の場所には行けない。根の堅州国は一つの異空間であるが、術者一人一人に割り当てられた場所でもあるのだ。だから、例え同時に入ったとしても、同じ場所には出られない。同じ場所に出るには、身体を接触させている以外はないのだ。

（誰がどこにいるのか、その全てを把握しているのは、建内宿禰たけしうちのすくねの

みという事か)

雅は舌打ちした。

土御門晴信は、雅が近くまで来ているのを感じていた。

「身の程知らずが。相手にするまでもないが、邪魔するつもりなら、滅ぼすまで」

晴信は新たに作った呪符を掲げ、

きゅうきょうにょつりよう
「急急如律令！」

と唱え、飛ばした。呪符は鳥のように飛翔し、雅を目指した。

藍は晴子を社務所に連れて行き、椅子に座らせると、学園に連絡し、晴子を早退扱いにしてくれるように頼んだ。

「変な男って、どんな男なの？」

藍は晴子の向かいに座り、尋ねた。晴子は涙をハンカチで拭いながら、

「背の大きい細身の男です。私をつけて来るんです」

「ストーカーなの？」

藍はビクツとして声を低くした。晴子は首を横に振り、

「わかりません。何かされた事はないのですが、登校時も下校時も、通学路にいつも待ち伏せしていて……。それで怖くなって小野先生に相談に行ったら、もうお帰りになったって聞いたので」

「そう、なんだ」

藍は苦笑いした。

(私がいなかったので、あんなところに来ていたの……)

藍はその時気づくべきだったのだ。学園から小野神社に来るのであれば、社のある場所を通るはずがないという事に。

「途中で会わなかった？」

藍は神妙な顔で尋ねる。晴子は藍を見て、

「いえ。この時間は、多分仕事なんだと思います。窓から外を見た時、通学路にいた事がありました。が、いつも下校時間の頃なんです。

私の授業内容を把握しているみたいで、早く終わる時は早く来ていて、遅くなる時は、その時間近くになると現れるんです」

「……」

藍はびっくりしていた。晴子は、大人しくてそれほど目立たないが、同級生の男子達には密かに憧れている者もいると聞いた事がある。美少女ではないが、愛らしい顔をしているし、性格も真面目で、成績も優秀、授業態度も良好。まさに絵に描いたような優等生なのだ。

「警察には相談したの？」

「はい。でも、何かされた訳ではないので、せいぜい注意をするくらいしかできないって言われました。只、それがきっかけで暴走する可能性もあるので、警察が乗り出すのは最終手段と考えてくれと」
晴子は悲しそうに説明してくれた。藍は、

「そうね。確かにその恐れはあるわね」

と腕組みをして頷く。すると晴子が急に藍の手を握って、
「ですから、今度先生と一緒に帰ってもらって、その人と話をしてほしいんです」

「え？ 私が？」

藍は突然の申し出に仰天し、目を見開いた。

「はい。ご迷惑でしょうか？」

晴子はさすがのような目で藍を見つめている。藍は思わず後ずさりしそうになったが、

「わかった。私が話をしてみるわ。案外、本当はいい人かも知れないしね」

「ありがとうございます！」

晴子は大喜びして、藍に抱きついた。

（この子、そういう子じゃないわよね？）

一瞬、そんな事を考えてしまう藍だった。

雅は、森から出ようとした時、唐突に感じられた晴信の気に驚い

た。

「何だ、今のは？」

何かが近づいて来るのがわかった。

（式神しきがみか？）

雅は漆黒の剣である黄泉剣よもつゝるぎを出して下段に構えた。

第六章 闇対闇

小野雅は、背後から迫る敵意に満ちた気を感じていた。

（奴め、余程俺の事が気に食わないようだな）

雅は右手に出した漆黒の剣である黄泉剣の剣先をツツツと上げ、正眼に構える。

（闇の力に頼る限り、貴様は藍には勝てない。まだわからないようだな、土御門晴信）

次の瞬間、宙を切り裂くような音がし、雅の頭上に巨大な黒い物の怪が現れた。式神である。雅は後ろに跳んだ。

「ぐおお！」

式神はドスンと地面に降り立つと同時に、その鋼のような筋肉を利用して一気に雅に迫る。

「ちっ！」

雅は式神を右薙に斬り裂く。

「ぐうわお！」

式神は真っ二つになったが、闇の力で復元し、もう一度雅に襲いかかる。

「ならば！」

雅は黄泉剣を投げ捨て、式神を右手の人さし指で指し示す。

「黄泉比良坂返し！」

と呪文を唱える。すると雅の右手の指先に真っ黒な空間が現れた。

「ぐわああ！」

式神は為す術なく、その空間に吸い込まれ、消えた。

「聞こえているな、土御門晴信。この程度の呪符で仕留められるほど、俺は弱くはないぞ。本気で来い」

雅は晴信を挑発した。

晴信は、放った式神があっさり消されたので、洞窟から出て来た。

「思ったより力があるようだな。しかし、所詮私の敵ではない」

晴信はニヤリとした。そして、また新たに作り出した呪符を放つ。

「今度は先ほどのようには行かぬぞ、小野雅」

呪符はまた鳥のように飛翔し、雅を目指した。

藍は祖父仁斎の様子を看に行き、もう大丈夫だと言われたので、本多晴子を伴って、杉野森学園に戻る事にした。始めは嫌がった晴子だったが、藍が説得すると何とか承知してくれた。

（こんな大人しくていい子をつけ回すなんて、とんでもない男ね）

藍はその男に会ったら、こっそり説教しようと思っている。腕力で敵わないとは思っていないところが、如何にも藍らしい。

「あ、そうか」

藍はバイクで戻ったのではない事を思い出した。そして、

（あいつ、今空き時間だったな、確か）

と剣志郎の携帯に連絡した。

剣志郎は、藍の携帯から連絡をもらい、慌てふためいてトイレに駆け込んだ。彼は廊下を歩いていたのだが、前から今付き合っている武光麻弥たけみつ まみがやって来たからだ。彼女から完全に逃れる唯一の手段は、トイレなのである。

「はい」

剣志郎は個室の一つに入り、携帯に出た。

「あ、今大丈夫？」

藍の声が聞こえる。

「あんまり大丈夫じゃない」

剣志郎は小声で応じる。

「何？ 声が反響してるんだけど？ どこにいるの？」

「トイレ」

剣志郎は正直に答えた

「やだ、何てとこで出るのよ。じゃあ、かけ直して」

藍はサッサと通話を切ってしまった。彼女はもうやら剣志郎が用を足している最中だと思っただけだ。

（誤解なんだけどなあ）

剣志郎はため息を吐き、個室を出ると、トイレからも出た。廊下を見ると、幸い麻弥の姿もない。それでも警戒を怠らない彼は、そのまま廊下を走って戻り、社会科教員室に駆け込んだ。今は他の教師達は全員授業中だ。

「よしと」

剣志郎は安心して藍にかけた。

「ごめんね、悪いタイミングで電話して」

藍は出るなり謝罪した。剣志郎は苦笑いして、

「別にいいよ。で、どうしたんだ？」

藍は手短かに事情を説明した。

「俺に迎えに来て言うのか？」

剣志郎はちょっとだけ呆れている。でも、本多晴子と一緒にいるなら、それも仕方ないと思った。

（それにしても、本多はどうして学園を抜け出したんだろう？）

その辺りの事情を藍は説明していないのだ。

「嫌なら別にいいよ。じゃあね」

藍は通話を切ろうとした。

「ああ、行くよ。行きます。喜んで迎えに行きます」

剣志郎は慌てて言った。電話の向こうで藍の笑い声が聞こえた。

剣志郎は事務長の原田に事情を話し、学園を車で出た。

（こんな事で呼びつけられても嬉しい俺って……）

何となく情けない気持ちになる剣志郎である。

携帯を切り、ポケットにしまう藍をジッと見ていた晴子が、

「小野先生と竜神先生って、付き合ってるんですか？」

と唐突に尋ねた。藍はビクッとして、

「そんな訳ないでしょ。竜神先生はね……」

そこまで言いかけ、

（そっか、剣志郎と武光先生が付き合っているのって、内緒なんだっけ）

藍は苦笑いして、

「竜神先生は、高校時代の同級生だから、電話したの。付き合ってなんかいないわよ」

すると晴子は、ニコツとして、

「そうなんですか。良かった」

と妙に嬉しそうな顔をする。藍はキョトンとしたが、

「何だ、本多さん、竜神先生の事が好きなの？」

「ち、違いますよ！ そんなんじゃないありません！」

晴子の全力の否定に、藍は剣志郎を哀れんだ。

（そこまで強く否定されるって、ちょっと可哀想ね）

そんな事を思い、ニヤついていると、

「私は、小野先生が好きなんです」

と晴子が言い出したので、藍はギョツとした。

「え？」

さつき抱きついたのは、そういう事なの？ 藍はドキドキして来

た。彼女は、高校時代から、男子より女子にモテていた。当時はそれも嬉しかったのであるが、中には結構本気な女子もいて、面食らった事もあった。

（私って、そういう気のある人に好かれるタイプなのかしら？）

真剣に悩みそうになる。すると藍の表情に気づいたのか、

「ご、ごめんなさい、先生。私……」

晴子が謝った。藍はそれによって我に返り、

「あ、いえ、私の方こそごめんなさいね」

二人は何となくおかしくなって、笑い合った。藍はまだ気づいていない。この事件の黒幕は、晴子である事に。

雅は、晴信が次に放った式神の動きを察知していた。

（来るか？）

彼は空を見渡す。しかし、気配は近づいて来ない。

（どこだ？）

雅は辺りを探り直したが、接近して来る気を感じられなかった。

式神は、忽然と姿を消してしまったのだ。

（そんなバカな……）

雅は戸惑っていた。その時である。

「ぐあああ！」

いきなり足下の土を吹き飛ばし、式神が現れた。

「何！？」

雅は虚を突かれた形になり、式神の鋭い爪で腹を切り裂かれた。

「ぐふ！」

口から血を吐き出し、雅は片膝を着いた。

「地中から……」

完全に意表を突かれた雅は、痛みと悔しさで顔を歪めた。しかも、式神の爪には、黄泉の妖気が含まれており、雅の腹部を溶かし始めていた。

「くそ……」

黄泉路古神道よみじ こしんどうの術者は、通常の人間に比べれば、妖気に耐性があるが、それにも限界はある。

（目が、霞む……）

雅は頭を激しく振り、もう一度式神を見る。

「がああ！」

式神は奇襲が成功したのを喜んでいいのか、雄叫びを上げた。

「おのれ、晴信め」

雅は流れ出る血を止める事もできずにいる。

（退ひくしかないのか）

雅は根の堅州国に消えた。

晴信は、雅が「逃走」した事を知り、フツと笑った。

「貴様如きがどう足掻こうとも、私に勝てるはずがないのだ、小野雅よ」

晴信は高笑いをした。そして踵きびすを返すと、洞窟の奥へと戻って行った。

第七章 櫛久保美好

剣志郎は、藍と本多晴子を迎えに行く車中で、無意識のうちに鼻歌を歌っていた。

（俺、何でこんなに浮かれてるんだ？）

自分の能天気加減に呆れてしまう。そして、深くため息を吐き、運転に集中した。

やがて大通りから路地に左折すると、その向こうに小野神社がある森が見えて来た。今まであまり感じた事がなかったのだが、住宅街の一角にあるその森は、神聖な気を放っているような気がする。

（あの竜の事件以降、俺も急に気を感じるようになったな）

それが誇らしい訳ではないが、何となく藍と共通する感じがして、にやけてしまう。

（いかん、いかん。何考えてんだ、俺は？）

また運転に意識を集中する剣志郎であった。

土御門晴信つちみかどはるのぶに傷を負わされた雅は、根ねの堅州国かたすくにでその傷を癒していた。

（こんな事を続ければ、俺もあの男と変わらなくなってしまふな…）

黄泉の妖気を黄泉の妖気で癒す。黄泉路古神道よみじこしんじどうの術者だからできる事であるが、それは同時に人でなくなっていく道でもあった。

「藍……」

雅は藍の無事を祈っていた。彼自身は、藍を確実に愛している。

しかし、先の建内宿禰たけしうちのすくねとの戦いで命を落とした京都小野家の後継者であった小野椿への懺悔の思いもあった。だからこそ、藍に自分を諦めて欲しいのだ。自分から藍を突き放す事ができない雅である。

（俺は藍を守るために黄泉路古神道を使い続けた。だから、このままこの身が減びようとも後悔はない）

雅は塞がって行く傷口を見て苦笑いする。

「黄泉路古神道を使えなければ、俺はどうに死んでいたらうな」
自嘲気味に呟いた。

土御門晴信は、新たな呪符を完成させ、洞窟を出た。

（あの女が小野楓の生まれ変わりであろうとそうでなかつたら、そのような事はどうでも良い事。私の悲願は日の本の神道を滅する事だ）

彼は黄泉路古神道を使い、根の堅州国に入った。

「む？」

根の堅州国は単一の異空間である。しかし、術者は他の術者と遭遇する事はできない。但し、他者の気を感じる事はできる。

（小野雅、早くも傷が癒えたか）

晴信はニヤリとした。

（だが、現世に戻りし時が貴様の命の果てる時だ）

晴信は根の堅州国を進み、現世に戻る。そこは彼が封じられていた社の前だった。

「わ！」

付近を歩いていた人々、そして走っている車のドライバー達が、いきなり現れた晴信に仰天した。

「いずれお前達は私に跪くのだ」
ひつこく

社に突っ込んでいた大型トラックは撤去され、警察の立ち入り禁止のテープが周囲に張り巡らされている。

「まずは、続きと行こうか」

晴信は藍の気を探り始めた。

藍と晴子は、剣志郎の車で移動中だった。助手席に乗るのを互いに譲り合う藍と晴子に、軽くショックを受けた剣志郎だったが、

「二人共、後ろに乗れば」

と「解決策」を提示し、車はスタートしたのだった。

「着いたぞ」

元々、歩いても行ける距離の杉野森学園だから、三人はたちまち到着した。

「ありがとう」

藍は笑顔で礼を言ったが、晴子は軽く頭を下げただけで黙ったまままだ。

（嫌われてるのかな？）

剣志郎は晴子に微笑みながら思った。剣志郎はそのまま駐車場まで車を進める。

「さ、行きましょう、本多さん」

藍は晴子を促して歩き出す。

「はい」

晴子は嬉しそうに藍の手を握ると、歩き出した。

「え？」

藍はまたドキッとした。

（考え過ぎよね？ 私、慕われているだけよね？）

藍は作り笑いをして晴子を見ると、手を振り払う訳にもいかないので、そのまま歩いた。

「あれ？」

そんな二人を廊下から由加達三人組が目撃した。

「本多先輩、どうしたのかしら？」

由加が呟く。波子がクイツと眼鏡を上げて、

「何が？」

「本多先輩、ずっと藍先生を避けていたのよ。理由はわからないけど」

由加は藍と晴子を目で追いながら言った。

「ふーん。じゃあ、良かったんじゃない」

お気楽な祐子が言った。

「でも、手なんか繋いじゃって、何だか怪しいわね」

波子がいたずらっぽく笑った。由加が呆れ顔で波子を見て、

「百合族ってか？ そんな訳ないじゃないの」

「百合族って何？」

祐子が興味津々の目で尋ねた。すると由加と波子が口を揃えて、
「ググレ、カス！」

と言った。祐子はその意味すらわからず、キョトンとした。

晴信は、藍の氣を追って杉野森学園付近まで来ていた。

「何？」

彼はギョツとした。学園の敷地全体に蠢く巨大な竜の氣を感じたのだ。それは藍の祖父の仁斎が「竜事件」で飛び散ってしまった学園を守っている竜の氣を集めて納め直したものだ。竜の氣は闇の氣を感じると動き出すように仕掛けられていた。だから、闇を合わせ持つ晴信に反応したのだ。

「おのれ……」

晴信は藍が学園から出て来るのを待つ事にした。

（この竜の氣、凄まじい。おいそれと近づけぬな）

晴信は再び根の堅州国に潜んだ。

晴信が根の堅州国に消えた直後、長身の男が現れた。彼の名は、
榎久保美好^{ならくぼ みよし}。晴信が言っていた「ストーカー」である。しかし、実情は違っていた。

（晴子の奴、計画変更だとかメールをよこしたが）

彼は高等部の正門の前まで来て、中を覗き込んだ。

高等部の二階の廊下を歩いていた武光麻弥は、窓の外に見える門のところで、中を覗いている不審人物に気づいた。

（誰？）

それは榎久保なのだが、当然麻弥は面識がないので彼の事は知らない。彼女はすぐさま携帯を取り出し、正門脇にある警備室に連絡した。

「門のところに変な男性がいます。警戒して下さい」

麻弥は過剰過ぎると思ったが、何かあってからでは遅いと判断したのだ。引き続き、窓から榎久保の様子を見る。程なく警備員が警備室から出て来て、榎久保に何か尋ねた。榎久保は何かを言い返し、すぐにそこから駆け去ってしまった。

（良かった、おかしな事にならなくて）

麻弥は、先日「竜事件」以降、何かと過敏になっているのだ。

（剣志郎さん、また小野先生を見ている事が多いし）

彼女は今日こそ藍と決着をつけようと思っているのだ。

（今日は絶対に逃がさないから）

いつも知らないうちに帰ってしまう藍を、今日は捕まえる気満々の麻弥である。

「くそ、人を犯罪者扱いしやがって」

榎久保はそう毒づくくと、足下に転がっていた空き缶を蹴飛ばした。

（晴子の奴、今度はどうするつもりなんだ？ 灯油を買っておいにくれだなんて）

榎久保は、最初は確かに晴子のストーカーだったが、いつの間にか晴子の手下のようになっていて自分が不思議だった。

（何でもいいさ。晴子と一緒にいられるならな）

彼はニヤリとし、学園から離れて行った。

藍は廊下を歩いていて、竜の気が蠢くのを感じた。

「何？」

藍は晴信が来たと直感し、走り出した。

（竜の気は闇に反応するって、お祖父ちゃんじいちゃんが言ってた）

すると、同じく気を感じた剣志郎が駐車場からやって来た。二人は職員専用の玄関で顔を合わせた。

「何だ、今の？」

剣志郎が尋ねる。藍はどうしようかと悩んだが、

「陰陽師が現れたの」

「陰陽師？」

剣志郎はキョトンとした。

「詳しく説明している暇はないわ。じゃあね」

藍はそのまま外へと駆け出していく。

「また、何か起こってるのか？」

藍の後ろ姿を見たまま、剣志郎は身震いした。

第八章 本多晴子の罠

藍は高等部の正門まで走った。

「あら？」

しかし、気配は消えていた。藍が駆けて来たのを見て、警備員が警備室から出て来た。

「どうかなさいましたか、小野先生？」

その人は警備室の責任者だ。藍はしまったと思った。

（何かあったと思われたかしら？）

彼女は跋^{ばっ}が悪そうに頭を掻いて、

「ああ、すみません。変な人が来ていないかと思って」と誤魔化そうとした。すると警備員はびっくりして、

「さすが小野先生ですね。先程、正門から中を覗いている男がいたんですよ。問い質したら、逃げてしまいました」

「そ、そうなんですか」

藍はその偶然に驚いた。そして、

（もしかすると、本多さんのストーカー？）

半分正解だが、まだ藍は真相に辿り着いていない。彼女は警備員に札を言って、正門から外に出た。そして辺りを見渡してみたが、怪しい人影はない。正門から覗いていた櫛久保^{なぐほ}美好^{みよし}は、杉野森学園から離れ、付近のガソリンスタンドに向かっていたのだ。

（また来るかしら？）

来たら、こっそり説教してやろうと思い、藍は校舎に戻った。

剣志郎は、藍が正門まで行ってしまったので、しばらく戻って来ないと考え、社会科教員室へと歩き出す。

「剣志郎さん」

その剣志郎を二階から降りて来た武光麻弥が呼び止める。

「は、はい」

剣志郎はまるでいたずらを見つけられた子供のようにピクンとした。すると麻弥はその様子を看着クスクス笑い、

「何ですか、そのリアクションは。私って、そんなに怖いんですか？」

剣志郎はその問いかけに苦笑いした。

（そうなんです、絶対言えないよなあ）

「とんでもないですよ」

麻弥はその応答にプウツと頬を膨らませて、

「ほら、また敬語。二人きりの時は、敬語は使わないでって言ったでしょ？」

「あ、そうでしたね」

剣志郎はまた敬語で応じてしまい、あっとなる。麻弥は呆れ顔で、「ホントにもう」

と腕組みをし、何かを言いかけたが、

「じゃ、また後で」

と急に踵を返して行ってしまった。

「どうしたんだ？」

剣志郎はキョトンとした。

「学園内で、イチャイチャしないでよね」

藍が言った。剣志郎は、

「ひっ！」

と飛び上がってしまった。

「失礼ね。何よ、それ？」

振り返ると、ムツとした顔の藍が仁王立ちしていた。剣志郎は頭を掻いて、

「あ、いや、ごめん、その、何だ……」

「バツカみたい」

藍はそんな剣志郎を放置して、そのまま彼の横をすり抜け、廊下の角を曲がった。

「はあ……」

こんな状態はもう身が保たない、と剣志郎は思った。

異空間である根の堅州国ね かたすくににいる雅は、土御門晴信つちみかど はるのぶが動いた事を察知していた。

（奴め、藍に仕掛けるつもりか）

雅は傷の完治を待たずに現世に戻った。そこは奥多摩の森の一角である。

（藍の気が迷っている。どうしたのだ？）

雅は藍の心の乱れを感じていた。そして、それは晴信にとって好機となってしまうとも思った。

「藍……」

雅はもう一度根の堅州国に入り、学園の近くに現れた。

「なるほど」

雅も学園を守護する竜の気には敵と見做みなされるため、また竜の気が動いた。

（だから奴は学園に仕掛けないのか。ジイさん、さすがだな）

雅はニヤリとし、学園から離れた。

晴信もまた、雅が近くに現れた事を知った。彼も根の堅州国から戻った。

（やはり小娘の前にあの男を始末しておくか）

藍と戦う時に邪魔されるのは困ると思った晴信は、雅の気を探り、追った。

（姫巫女流と黄泉路古神道よみじ こしんどう。どこまでも我が道を邪魔する存在なのか？）

晴信は齒軋こげんりした。

藍は次の授業の準備を始めていたが、再び竜の気が動いたのでハッとした。

（また来たの？）

しかし、すぐに竜の気は鎮まった。

「何、今の？」

藍は首を傾げた。

「気忙きせわしいわね」

ちよつとだけイラツとし、藍は社会科教員室を出た。そして彼女は、晴信が雅を追っているのを察知した。

「雅……」

藍はギクツとし、走り出した。

「藍……」

藍が「雅」と呟いたのを、剣志郎が聞きつけてしまった。

（まだあいつの事を……）

剣志郎は気が滅入って来た。

仁斎は竜の気が乱れたのを感じていた。

（陰陽師め、まだうろついているのか）

彼は布団から起き上がり、携帯電話を手にした。

「藍では勝てぬかも知れぬ」

仁斎は山形の遠野泉進に連絡した。

藍は廊下を走って職員専用の玄関に着いた。すると、

「小野先生」

と本多晴子のクラス担任の女性教師が声をかけて来た。

「何でしょうか？」

藍はその只ならぬ様子を感じ取り、声を落として尋ねた。

「本多晴子がいなくなっていました。どこに行ったか、ご存知ありませんか？」

「え？」

藍は仰天した。まさかそんな事になるとは思っていなかったのだ。

（ストーカーが本多さんを連れ去ったの？ そんなはずはないわ）

藍はクラス担任を見て、

「付近を探してみます」

と言うと、外へ出た。

「本多さん」

藍は責任を感じていた。自分がすっかり最後まで晴子を見ているべきだったと思ったのだ。しかし、それこそが本多晴子の狙いなのを藍は知らない。

晴信は根の堅州国と現世を歩きつ戻りつしながら、雅を追っていた。

（あの男、私に追われているのを気づいたか？）

雅は晴信が簡単に追いつけないように同じ事をしているのだ。

「おのれ！」

晴信は現世に戻ると式神しきがみを出す。

「奴を始末せよ！」

そして、式神に黄泉の妖気を合わせた。

「はっ！」

晴信は式神を放った。

藍は学園の前の道を走っていた。

（こっちから、本多さんの気を感じる）

彼女は懸命にそれを探った。晴子の罠とも知らずに。

「この先ね」

藍は路地の角を曲がり、廃ビルの前に出た。数年前から放置されている通称「お化けビル」だ。しかし、そこにそのような類いは存在しない事は、藍自身はよくわかっている。

「この中？」

藍は躊躇う事なくビルの中に入った。

「本多さん、いるの？」

藍は大声で呼びかけた。

「先生！」

晴子の声が上の階から聞こえる。

「本多さん、どこ？」

藍は崩れかけた階段を駆け上がる。

「先生！」

晴子の声が近くなった。

「こっち？」

藍は三階に着くと、突き当たりの部屋を目指す。

「本多さん！」

藍はそこに晴子がいると確信し、飛び込んだ。

「先生！」

ところが、晴子の声はその部屋の隅に貼られた呪符から聞こえていた。

「え？」

藍は何が起こったのかすぐにはわからない。

（何、どういう事？）

次の瞬間、その部屋のドアが閉じられ、何かがドスンと置かれる音がした。

「何？」

藍は慌ててドアに駆け寄るが、ドアは塞がれており、全く動けなくなっていた。

「本多さんなの？　　どういうつもり？　　いたずらにしては、大袈裟過ぎるわよ」

藍は大声で叫ぶ。すると、晴子の声がけたたましい笑い声を發した。藍はギクツとした。

「いたずらじゃないわ、小野先生。貴女にはここで死んでもらうんだから」

「え？」

藍は声がどこから聞こえているのか探る。しかし、わからない。

「ええ？」

次の瞬間、黒い煙が部屋に漂い始めた。炎が燃え上がるような音が聞こえる。

（まさか……）

そのまさかだった。藍がいる部屋は周りが燃えているのだ。すでに逃げ出す事ができなくなっている。

「きゃっ！」

藍は柄にもない声を出してしまった。壁の一部が炎の熱で弾けたのだ。

「本多さん、どういふつもり？ 何故こんな事をするの！？」

藍は充満して来た煙を吸わないように態勢を低くして口にハンカチを当てた。

「私の先祖の仇かたきなのよ、先生の家は。だから死んでもらうの」
晴子はまたけたたましく笑った。

「先祖の仇？」

藍は煙から逃れながら、いろいろと考えを巡らせた。

（本多さんはまさか……）

そこまで考えた時、炎が一挙に部屋の中に広がった。熱さと息苦しきで、藍は倒れそうだった。

第九章 時を超えた執念

小野藍は、人生始まって以来の危機を迎えていた。

「く……」

迫り来る炎と黒煙。呼吸もままならなくなり、目もまともに開けていられない。

（このままじゃ、本当に死んでしまう……）

藍は床を這いずるようにして窓際に向かった。するとそれを見ているかのように、

「先生、そこは三階よ。窓から飛び降りたら、只じゃすまないわ」
狂気を含んだ本多晴子の甲高い声が響く。藍は煙を堪えて天井を見渡す。その一角に小さな監視カメラが据え付けられているのが見えた。

（あれで私の様子を見ているのね）

藍は更に窓に接近する。

「まさか、煙を吸い込み過ぎておかしくなってしまったの、先生？」
晴子の嘲笑が聞こえるが、藍は構わずに窓に辿り着く。

「くう！」

窓を開こうとしたが、どれもしっかり目張りされていて、ビクともしない。

「無駄よ。飛び降りて死なれたらつまらないから、窓は塞いであるの」

藍は思い切りガラスを叩いた。

「それも無理よ、先生。ガラスには防犯用のシールを貼ってあるから、女の人が殴ったくらいじゃビビも入らないわ」

晴子のけたたましい笑い声が聞こえる。そして、炎の勢いが増し、煙が立ち込めて来る。

「ならば！」

藍はハンカチを放り出し、柏手を打った。

「大綿津見神よ、炎を消し去りたまえ！」
おおわたつみのかみ

しかし、何も起こらなかった。

「ダメよ、先生、そんな力に頼っちゃ。その部屋は、私が貼ったお札で結界を作っているの。だから、外からの術は使えないわ」

藍は晴子のその言葉に歯軋りした。

「それなら！」

藍は気を高める。

「今度は何をするつもりかしら、小野先生？」

晴子がバカにしたように尋ねた。藍はそれには反応せず、気を高め続ける。炎がすぐそばまで燃え広がり、煙で喉が焼け付きそうだ。

「はあ！」

藍は高めた気をガラス窓にぶつけた。するとガラスが防犯シールごと吹き飛び、そこから外の空気が一気に流れ込む。

（しまった！）

藍は自分のした事を後悔した。部屋の中は酸欠寸前だ。そこに外から大量の空気が流れ込む。

（バックドラフト！？）

一酸化炭素と酸素が急激に化学反応を起こし、爆発が起こったのだ。

「きゃあああ！」

藍は爆風で吹き飛ばされ、外に投げ出された。

「高天原に神留ります、天の鳥船神に申したまわく！」
たかまがはら かんづま あま とりふねのかみ

藍は落下しながらも冷静さを保ち、祝詞を唱えた。彼女の身体は光に包まれ、落下を止めると、一気に浮上した。

「そんな！」

ビルの反対側の路地でその様子を見ていた晴子は仰天した。藍は晴子を見つけると、目の前に降り立った。晴子はすぐさま逃げ出そうとしたが、藍に捕まってしまった。

「本多さん、どういう事か、説明してもらおうわよ」

藍は顔を背ける晴子の両肩を掴んで言った。そして携帯電話を取

り出すと、消防署に通報した。

雅は、土御門晴信が式神を放ったのに気づいていた。
（こっちに目を向けてくれたのは作戦通りだが、さてどうしたものか？）

雅自身、晴信に対抗する手段が思い浮かばない。

（陰陽道と黄泉路古神道の融合は厄介だな）

現世では危険だと判断し、雅はもう一度、根の堅州国に入った。

（奴の式神には俺の黄泉醜女が通用しない。ならば、採るべき道はあれしかないか）

彼の編み出した奥義である「黄泉比良坂返し」を使うしかないが、その術は、長く使えないし、何度も繰り返せるものではない。

（奴の妖気と能力から考えて、俺の方が手詰まりになるか）

その時彼は、今は亡き小野椿の声が聞こえた気がした。

「何？」

幻聴だと思った。しかし、確かに聞こえたのだ。

（そうか、神魔の剣か）

かつて雅も一度だけ出した事がある、清濁合わせ持つ剣だ。

「やってみるか」

雅は意を決して現世に戻った。そこは広々とした河原だった。そして、

「黄泉剣」

と漆黒の魔剣を右手に出す。そして、

「神剣、草薙剣！」

と左手に姫巫女流の剣を出した。

（本来なら、藍が出す姫巫女の剣の方が確実だが）

今はそんな時間はないのだ。

「神魔の剣！」

雅は二つの剣を合わせる。剣から、凄まじい気が放出された。

雅の発する気を感じ、晴信は進むのを止めた。

「何事ぞ？」

彼は眉をひそめた。

（これはもしや、陰陽の剣か？　なるほど）

晴信はニヤリとした。

（愚か者め。その剣でこの私を仕留めるつもりか、小野雅。浅はかな事よ）

彼は再び雅に向かい始めた。

藍はビルの火事が収まるのを見届けてから、晴子を引き摺るようにして神社に向かい始めた。

「放してよ！」

「大人しくしなさい」

藍は嫌がる晴子を強引に歩かせる。傍から見れば、藍が悪人に見えるだろうが、幸い付近に人はいない。皆火事を見に行っているのだ。

「貴女がした事は、本来なら警察沙汰になる事なのよ、本多さん」

藍は晴子を見据えて言った。

「だったら、警察に突き出せばいいでしょう？」

晴子は開き直ったように嘯く。藍はカチンと来て、

「それじゃあ、私の気がすまないから、そんな事はしない。小野神社の人間を怒らせたらどうなるか、思い知ってもらうわ」

と晴子を睨みつけた。その迫力に晴子はギョツとした。

「さあ」

藍が角を曲がり、小野神社への道を歩き始めた時だった。

「おらあ！」

いきなり背後から何者かが現れ、藍を突き飛ばした。

「え？」

藍はバランスを失って倒れかけたが、何とか踏み止まり、彼女を突き飛ばした犯人を見た。

「晴子を放せ！」

そこにいたのは、ギラギラとした目で藍を睨むならくぼ みよし 榎久保美好だった。
「ありがとう、榎久保さん。助けに来てくれたのね」

晴子は美好に抱きついた。そしてニヤリとして藍を見る。

「貴方は……？」

藍には突然現れた美好が誰なのかわからない。

「俺は晴子の恋人の榎久保美好だ」

「何ですって？」

美好の言葉で、藍は彼の素性を知った。

（この男が、本多さんのストーカー？　そして、本多さんの協力者なの？）

晴子と美好の間に漂う気は、二人が仲間なのを示している。

（どういう事なの、一体？）

藍は混乱していた。

雅は剣を正眼に構え、晴信を待ちかまえた。

（今度は不意打ちなどさせないぞ）

彼は地中にも気を配っている。しかし、晴信は意外にも正面から現れた。

「陰陽の剣か？　考えたな」

晴信は全く動じていない。雅は訝しそうに彼を見た。

（この剣を知っているのか？　何故だ？）

すると晴信は雅の考えを見透かしたかのように、

「その剣は、本来は陰陽道のものだ。何を思ったか知らぬが、そんな鈍なま々な刃で、私を斬れると思っているのか？」

「何！？」

雅は晴信の言葉に驚愕した。

（陰陽道のものだど？）

雅は、「陰陽の剣」というのは、光と闇を指し示すのだと思っていたのだ。

（まさに陰陽道の剣という意味だったのか？）
彼の額に汗が流れた。

（勝てないのか、こいつには？）

晴信はニヤリとし、

「さあ、どうする、小野雅？」

と余裕の表情を浮かべていた。

第十章 本多晴子の素性

藍は、自分を焼き殺そうとした本多晴子と、その恋人を気取る櫛^な久保美好^{らくぼ みよし}をジッと見た。

（どういう事なの？ 何故？）

その藍の訝しそうな顔を見て、晴子が口を開く。

「知りたいのなら、教えてあげる。私の先祖は、あの陰陽道の名門である土御門家の方なの」

晴子は得意満面で話す。隣に立つ美好はそれに応じるように頷く。
「何ですって？」

藍はそうではないかと思っではいたが、実際に晴子に言われると思わず大声を上げてしまった。

「その方のお名前は、土御門晴信様^{つちみかど はるのぶ}。名だたる陰陽師の中でも、飛び抜けて優れた術者だったのよ」

晴子は得意そうと言うより、すでに陶醉の域に達しているようだ。目がトロンとし、口は終始笑みを浮かべている。

「……」

藍はギリツと歯を軋ませる。

（やはり、手引きをした者がいたのね。まさかこの子があの陰陽師とつながっているとは思わなかったけど……）

「私のご先祖様は、代々晴信様のご無念を語り継いで来たの。そして、光と闇が滅びし時、我の封を解けと言われて来たのよ」

晴子のその言葉に藍は更に驚いた。

（土御門晴信は、建内宿禰^{たけしうちのすくね}と辰野神教の事を見抜いていたと言うの？）

「そしてまさに時は満ちた」

晴子はまたけたたましく笑った。普段の彼女を知っている人が見たら、よく似た別人と思うくらい、晴子は違う顔になっていた。彼女は美好に再び抱きつき、

「檀久保さんの力を借り、私は晴信様を封じていた結界を破ったの。これからまさに日本が変わるの。世界を統べる方が蘇ったのよ」と言い放った。藍は哑然としてしまった。

（何を言っているかわかっているの、本多さん？）

「そして私は、晴信様のために時の御子^{ときみこ}を産むの。その子が世界を統べるのよ」

「何を言っているの、本多さん！？」

藍は晴子が只晴信の子孫だと言うだけでなく、何かをされたと考えた。そして美好を見る。

（この男が黒幕とは思えない。一体誰が背後にいるの？）

晴子の衝撃的な発言に、美好も仰天したようだ。

「何言ってるんだ、晴子？ お前は俺と結婚してくれるんじゃないのか？」

美好は笑い続ける晴子の両肩を掴んで揺さぶった。

「そうよ。貴方と結婚するわ。但し、産むのは晴信様の御子よ」

晴子の目は狂気を宿し始めていた。

「妖気？」

藍は微かではあったが、晴子に宿る妖気を感じた。そしてそれは何度も感じた事のあるものとわかった。

（建内宿禰が？）

晴子の身体から僅かに発せられている妖気は、京都小野家の椿がその身を犠牲にして封じたはずの建内宿禰のものであったのだ。

（どういう事なの？ 何故、本多さんの身体にあいつの妖気が宿っているの？）

その恐るべき因縁を藍は知る術がない。

その頃、山形県鶴岡市を発った修験者の遠野泉進は空路で羽田に到着していた。

（東京に入る前から、気分が悪くなる程の気を感じていたが、地上に降りると更に壮絶じゃな）

泉進は空港からタクシーで杉野森学園を目指した。

「藍ちゃん、無茶はするなよ。相手は相当な強者だぞ」
つわもの

泉進は眉間に皺を寄せ、窓の外を睨んだ。

おのまやび

小野雅は正眼の構えを崩さずに晴信を見据えている。晴信はそんな雅をニヤついた顔で見ている。

「どうした、小野雅？ 構えているだけでは私は倒せぬぞ？」

雅は齒軋りしたが、動かない。

（奴が言った『その剣は、本来は陰陽道のもの』の意味する事がわからない。本来とはどういう事なのだ？）

すると晴信は雅の心を見透かすかのように、

「教えてやろう。陰陽道とは光と闇を束ねる呪術。その片方のみを使う姫巫女流や黄泉路古神道など所詮我らの流派の亜流に過ぎんだ」

「何だと？」

雅は眼光を鋭くし、晴信を睨みつける。

「お前が持っているその剣は我ら陰陽道の剣。故にその剣で私を斬る事などできぬ」

晴信は雅を哀れむような目で見た。

「……」

雅は打ちのめされていた。

（昔、仁斎のジイさんから聞いた事がある。『陰陽道は敵にしてはならぬ。光と闇を束ねる呪術故、争えば、姫巫女流でも勝てぬ』と。それはあの楓の父である栄斎の言葉だと……）

「お前が動かぬのなら、私から行くぞ」

晴信は呪符を袂から取り出し、雅に近づく。

「く……」

完全に晴信の気に吞まれてしまった雅は、なす術なく立ち尽くしていた。

藍は建内宿禰の妖氣を纏まとっている晴子を見やる。

（このままでは本多さんは闇に取り込まれてしまう。どうすれば…
…）

晴子はそんな藍の心配を他所に美好を見上げ、

「さあ、行きましよう、櫛久保さん」

と歩き出した。

「あ、待って、本多さん！」

藍が二人を追おうとすると、目つきの悪い男二人が立ちはだかる。

「何？」

藍はその隙に走り去ってしまう晴子を見つつ、男達を睨む。妙な
雰囲気を漂わせた連中である。

「何なの、貴方達は？」

すると男達は警察官の身分証を掲示した。

「ご同行願えますか？」

あまりの事に藍は言葉を失ってしまった。

（何なのよ、全く！）

誰に抗議すればいいのか迷ってしまうほど、意味不明な状況である。

「私はあの子の学校の教師です。一体どういう嫌疑で同行しなければならぬのか、ご説明願えますか？」

それでもそんな事で足止めをされている場合ではないと思い、何とか言い返した。

「それも署でお願いします」

刑事の一人が藍の右手を取った。その途端、藍は刑事二人が晴子の術にかけられている事に気づいた。

（情けない！）

藍は気合いを入れ、刑事二人にかけられた術を弾き飛ばす。

「うわ！」

二人にかけられた呪符は藍の光の力でボウツと燃え上がり、消えた。

「え？」

キョトンとして立ち尽くす二人をその場に残し、藍は晴子と美好を追いかけた。

（本多さん……。呪符まで操るの？）

藍はますます危機感を抱いた。

（黒幕は建内宿禰……。間違いなさそうね）

しかし、根^ねの堅州国^{かたすくに}に封じ込められたはずの建内宿禰がどのような方法で晴子に自分の妖気を纏わせたのかはわからなかった。

晴信は呪符を宙に投げ上げる。

「いずれにしても、お前は死ぬる身。これ以上話をしたところで栓なき事」

晴信は呪符を式神^{しきがみ}に変え、雅に向かわせる。

『大丈夫、自分の力を信じなさい、雅』

雅はまた亡き小野椿の声を聞いた。

（そうか？）

雅はその声に苦笑いした。椿の音がするはずがない。雅はそう思ったが、

「まだ終わった訳ではないからな」と迫り来る式神を見た。

第十一章 妖気の質

小野雅は、土御門晴信の放った式神を待ち構える。
おのみやび つちみかど はるのぶ しきがみ

「ぐあおう！」

三体の式神が雅に一足飛びに襲いかかる。

「黄泉醜女！」
あふちしめい

雅は右手の指全てから黄泉の魔物を放つ。晴信はそれを見て笑う。

「愚かな……。お前はまた同じ手を使うのか？」

しかし、雅は黄泉醜女に仕掛けをしていた。

（奴の妖気が俺の思っている通りなら、これは効くはずだ）

雅はフツと笑った。

「ふううおお！」

黄泉醜女は式神に取り憑いた。

「同じ事だ」

晴信がほくそ笑む。しかし、次の瞬間、晴信は愕然とした。

「ぐあおお！」

式神が黄泉醜女に取り込まれ、消滅してしまったのだ。黄泉醜女は三体の式神を完全に取り込んでしまうと、晴信に向かった。

「おのれ！」

晴信は呪符を取り出し、それを剣に変えた。

「如何なる術だ？」

晴信は眉間に皺を寄せ、黄泉醜女を睨みつける。

「言っただ。闇の力に頼る限り、姫巫女流には勝てない」と

雅が一步踏み出して言った。晴信は齒軋りして、

「お前は闇の力の使い手であろう！」

と激怒した。そして剣で黄泉醜女を斬り裂いた。しかし、黄泉醜女は再生し、再び晴信に襲いかかる。

「ぬう！」

晴信は後ろに飛び、黄泉醜女から離れた。

（これは如何なる事だ？）

自分が雅に仕掛けた事をそっくりそのままやり返されたので、晴信は混乱していた。

「お前は何か思い違いをしているようだ。黄泉路古神道よみじ こしんどうはあくまで姫巫女流の亜流。別の流派ではない。そして、前にも言ったが、お前の黄泉路古神道はまだ入口で彷徨さまよっている程度のものだという事がまだわかっていないようだな」

雅は続けて黄泉醜女を放つ。

「何!？」

晴信は襲いかかって来る黄泉醜女に妖氣まよを纏まとわせた式神を放った。「これならばどうだ!？」

しかし結果は同じだった。式神は黄泉醜女に取り込まれてしまった。

「うぬ……」

晴信の額に汗が伝わる。

「くう!」

彼は黄泉醜女の襲撃をかわすために根ねの堅州国かたすくにに逃げ込んだ。

「逃げたか……。引き際がいいな」

雅の戦法は、激情型の小野源斎のような相手か、プライドの高い小山舞のような性格であれば、完全に追い込めたはずだった。

（土御門晴信は、元々は親すら知らない孤児だったと聞いた。その頃の経験が、只の術者と違ふところだな）

雅は晴信の戦い方に戦慄した。

（命を賭してまで戦いを断行する事はしない。奴には大きな望みがある。ここで倒れる訳にはいかないという事か）

雅は黄泉醜女を戻し、自分も根の堅州国に入った。そのまま現世にいと、晴信の不意打ちに対応できないからである。

（やはり、奴の力の根源は建内宿禰たけしうちのすくねだ。奴の妖氣に似せて黄泉醜女を作ると、妖氣の強さで勝る俺の方が優位か。しかし、このままでは勝てない）

晴信の妖気を上回る事ができても、晴信を倒せる訳ではない。

「藍に頼るしかないか」

雅は苦笑いした。

藍は行方をくらませた本多晴子と、彼女の手下と成り果てている
榎久保美好ならくぼ みよしを追っていた。彼女は晴子の気を探っていたが、途中で
全くわからなくなってしまった。

「どこへ行ったのかしら？」

藍は大通りに出ていた。しかし、晴子と美好の姿はどこにもない。
(まさか、土御門晴信のように黄泉路古神道が使える訳ではないわ
よね)

そんな最悪の想像までしてしまう。

「おお、藍ちゃん、良かった」

そこへ、羽田からタクシーでやって来た遠野泉進が現れた。

「泉進様！」

藍の顔が明るくなった。

「仁斎はどうした？」

泉進はタクシーを降りて藍に近づく。

「怪我をしましたか、もう大丈夫です」

「年寄りは関わらん方がいい」

泉進は真顔で言ったが、藍は思わず吹き出した。仁斎が聞いたら、
さぞ怒るだろう。

「何がおかしいんだ？」

泉進が睨んだので、藍は慌てて笑うのを止め、

「いえ、別に」

と言うと、今までの事を説明した。

「土御門晴信が蘇ってしまったのは仕方がない。しかし、始末が悪
いのは、奴が引き摺っているものだ」

泉進は腕組みをして歩き出す。藍はそれに従い、

「引き摺っているもの、ですか？」

「気がついているのだろう、奴が出している妖気に？」

泉進は立ち止まって藍を見やる。藍はハッとして、

「建内宿禰の妖気、ですね？」

「さよう」

泉進は再び歩き出す。

「奴の執念には舌を巻くな。まだこの世に戻ろうとしているのだからな」

「でも、雅は、もう絶対に戻って来られないって言ってましたよ？」

藍が反論すると、泉進はニヤリとして、

「藍ちゃんも相変わらず『雅一筋』じゃな」

「や、やだ、泉進様、そういうつもりでは……」

藍は顔を赤らめて口を尖らせる。泉進は大笑いしてから、

「雅の言う通りだとは思うが、何しろ相手は黄泉の国の親玉だからな。思わぬ裏技を知っているのかも知れんぞ」

「裏技？」

ゲームじゃないんですから。藍はちょっとだけ呆れてしまった。

しかし、建内宿禰はまさしく「裏技」を使って来るのである。

晴子と美好は、裏通りにあるラブホテルに入っていた。美好は興奮している。しかし晴子にはそんなつもりはない。彼女は藍の追跡を振り払うために入ったただけだ。

（小野先生は男を知らないと聞いた。だから、淫の気が蠢いているここは、先生には死角になるはず）

晴子は先祖代々陰陽道を伝えて来た一族だけあり、結界や呪符だけではなく、気にも精通していた。

「晴子、俺……」

美好は晴子に襲いかからんばかりである。

「だめ、楢久保さん。それは全部終わってからって言ったでしょ？」

晴子は小首を傾げて上目遣いと言う。美好はその可愛さにノックアウト寸前である。

「わ、わかった。じゃあ、どうしてここに入ったんだ？」
男なら誰でも抱く疑問である。

「あの先生を撒くためよ。あの先生、処女なの」
晴子の目が凶悪に輝く。

「処女？」

美好はニヤリとした。彼は晴子の術中なのだ。

「そうよ。櫛久保さんは、男を知らない女性が好きなんでしょ？」

晴子は更に邪悪な気を漂わせて言う。美好は、

「ああ。でも今は晴子が一番……」

と言ったが、晴子の右手の人差し指が彼の口を塞ぐ。

「今は、小野先生を一番好きになって、櫛久保さん」

美好の目つきが変わる。操り人形の目である。

「ああ、わかったよ」

美好も凶悪な目になった。晴子はそれを見てフツと笑った。

「こっちじゃ」

泉進は藍に教わった晴子の気を探り、藍を先導していた。

「どうしてわからなくなったのか、すぐく不思議なんですけど」

藍は言い訳に聞こえるかも知れないと思いながら、泉進に説明する。

「途中でいきなり本多さんの気が消えてしまったんです」

「いきなり消えるなんて事はあり得んぞ。黄泉路古神道でも使わない限りな」

泉進も同じ事を考えたので、藍はギクツとした。

「まさか……」

「いや、そうではない。なるほど、その少女、かなりの悪だな。藍ちゃんの弱点を突いて来たようだ」

泉進は晴子の気がどこに隠れたのか見抜いていた。

「私の弱点？」

藍はキョトンとして泉進を見る。泉進は大きく頷き、

「ここだよ」

と目の前の建物を見上げる。藍もそれに釣られて見上げ、赤面した。
「こ、ここ？」

そこは、晴子と美好が入ったラブホテルだった。

第十二章 藍の危機

藍はラブホテルの前にいる自分に気づき、動揺していた。

「こ、ここって、その、あの、えーと……」

いろいろいけない事が頭の中で渦巻く。遠野泉進は大笑いして、
「巫女の藍ちゃんには刺激が強過ぎるな。しかし、だからこそ格好の隠れ場所という事だ」

と言うと、建物の中へと歩を進める。

「せ、泉進様？」

それを見て、藍は仰天した。

「どこに行かれるのですか？」

「どこって、中にその少女がおるのだろう？ 引っ捕まえに行くんだよ」

泉進は、何を言ってるんだ、と言う顔で振り返る。

「いえ、あの、えーとですね……」

藍は適当な言葉を思いつけず、どんどん顔を赤くして行くばかりである。

「案ずるな。二人は何もしておりやあせん。男の方はそのつもりだったようだが、少女の方が一枚上手だ」

「は、はあ……」

火照る顔を扇ぎながら、藍は泉進を見る。その時だった。

「あ、泉進様！」

藍は中から飛び出して来たならくば櫛久保みよし美好に気づいた。美好はどこで見つけて来たのか、一メートルほどある木の棒を振り上げ、泉進に殴りかかる。

「どりゃああ！」

さっきまで全く美好に気づいていないような素振りだった泉進は、あっさりそれをかわし、すぐさま反撃に出る。

「はあ！」

泉進は右の掌底を美好の無防備な背中に打ちつけた。

「ぐは！」

美好はそのまま吹っ飛ばされ、地面を転がる。藍は思わず、

「凄い！」

と叫んでいた。実際、泉進の掌底の一撃は凄まじく、美好はもがき苦しんでいる。

「愚か者め。人は下衆な考えを持つと、身体中からおぞましい気が吹き出すのだ。いくら声を潜め、気配を消したつもりでも、無駄よ」

泉進は美好を見下ろして言い放つ。

「へえ、そうなんだ、凄いねえ、お爺ちゃん」

バカにしたような口調と顔で、パチパチと拍手をしながら本多晴子が現れた。

「本多さん！」

藍がその姿を見て叫ぶ。泉進も晴子を睨み据え、

「儂は相手が女でも、悪い奴には手加減はせんぞ、お嬢ちゃん」

しかし、晴子は怯むどころか、腹を抱えて笑い出す。

「受けるわ、お爺ちゃん。私を脅かしているつもりなの？ 全然怖くないんですけど？」

晴子のその物言いに、泉進よりも藍が激昂した。

「本多さん、貴女ねえ！」

藍は晴子に向かって大股で歩き出した。

「わあ、怖いんだ、小野先生ったら。晴子、泣いちゃいそう」

それでも晴子は余裕たっぷりの笑みだ。

「ぬう！」

泉進は虚を突かれ、いきなり襲いかかって来た美好の一撃を後頭部に食らってしまった。

「ぐ……」

さすがの泉進も、予期せぬ攻撃で膝を折り、地面に倒れた。

「こやつ、何かされておるのか……？」

泉進は自分を見下ろす美好を見て呟く。美好は妙な氣を纏まとっている

た。

「泉進様！」

藍は晴子に近づくのを止め、泉進に次の一撃を見舞おうとしている美好に向かう。

「ダメよ、先生。貴女はここで檐久保さんと愛し合うんだから」

晴子のその言葉が聞こえた瞬間、藍は動けなくなった。

「私、何度か先生に接触したでしょ？ そのたびに少しずつ呪詛をかけてたのよ。わからなかった？」

何とか動く首を回して晴子を見ると、彼女は嬉しそうにそう語る。

「そして、これが止めよ」

晴子は制服の下から呪符を取り出す。

「これを貼れば、先生は私の奴隷になるの。そして、このホテルで、檐久保さんとずっと愛し合うのよ」

藍は戦慄した。晴子はケラケラ笑いながら、藍の額に呪符を貼った。呪符がスウツと藍の身体の中に消えて行く。

（愛し合うって……）

身体は全く動かせないが、汗は全身から噴き出して来る。

「おりゃ！」

その間も、美好は泉進を木の棒で滅多打ちにしていた。泉進は亀のように丸まって頭を防御しているが、それにも限界がある。

「檐久保さん、もうお爺ちゃんはいいわ。それより、小野先生を気持ちよくしてあげて」

晴子がニヤリと言う。美好は木の棒を放り投げ、藍を見る。

「そうだな」

その目はもはや野獣の目だ。そして、晴子の操り人形の目でもある。

「く……」

藍は声も出せないのに気づく。美好はそんな藍に近づくと、スツと彼女の身体を抱え上げる。貧相な身体の割に力があるのも、晴子の術のせいかも知れない。

「綺麗だなあ、この人」

美好は藍の顔と首筋を舐めるように見つめる。藍は全身に蕁麻疹じんましんが出そうになった。

「汗掻いてるよ。興奮してるのかな？」

美好はニツとして晴子を見やる。晴子はフンと鼻を鳴らして、

「そんな事はどうでもいいわ、楢久保さん。早く先生を運んで」

「ああ」

藍はホテルの従業員達がどうして気づかないのだろうと不思議に思ったが、ホテル全体がすでに晴子の術中なのだ。

「先生、気持ち良くしてあげるからね」

美好は藍の耳に口を付けるようにして囁いた。藍は泣きそうだった。

（雅……）

そんな時にも、彼女が思い浮かべるのは小野雅おのみやび、かつての許婚いいなすけである。

その雅は、異空間である根ねの堅州国かたすくににいた。しかし、彼にははつきりと藍の助けを求める声が聞こえた。

「藍？」

彼はすぐに現世に戻った。そこは藍と泉進が出会った通りだ。付近を歩いていた人達は、突然現れた雅に仰天した。

（これは、陰陽道の気？ 何だ？）

雅が路地に入り、その気を辿り始めた時、

「そこか！」

つちみかど はるのぶ
土御門晴信が現れた。

「く！」

雅は素早く反応し、晴信から離れる。晴信はニヤリとし、

「我が末裔が、楓の生まれ変わりの女を勾引かどわかしたようだな」

「何？」

雅はその言葉に眉をひそめた。そして、藍の気を取り囲む淫の気

に気づく。

「おのれ！」

下衆な考えを巡らせた者がいる事を知り、雅の目が怒りに燃える。
「なるほど。お前はあの女に惹かれておるのか。面白い」

晴信の顔が邪悪に歪む。ゆが雅は齒軋りした。

「ならば、尚の事、お前をあの女に会わせる訳にはいかぬな」

晴信は袂から幾枚もの呪符を取り出した。たもと

その頃、藍が晴子を追って学園の外に出て行った事を警備員から聞いた剣志郎は、彼女の身を案じて辺りを探し回っていた。

（何だか嫌な予感がするんだよな）

剣志郎は自分の中に僅かに残った竜の気を頼りに、藍の行方を追った。

「こっちか？」

何となく藍の居場所がわかる気がして、剣志郎の胸は高鳴った。

（藍を感じられる？）

そう思い、顔を赤らめる。

「え？」

そんな妄想を繰り広げていた時、剣志郎は藍の叫びを聞いた気がした。まさに雅が感じたものと同じだ。

「藍！」

叫び声が聞こえた方向へと走る。そして、辿り着いた場所。

「まさか……？」

剣志郎は、つい先程藍が見上げていたのと同じ建物を見上げる。

「ここって……？」

我が目を疑う剣志郎である。

（いや、まさか、藍がこんなところに入るなんて……）

その藍は、美好によって、ホテルの一室に運ばれ、ベッドに寝かされていた。

「さあ、檐久保さん、シャワーを浴びて来て」

晴子の命令とも要請ともとれる言葉に、美好はニヤリとして、
「わかった」

と嬉しそうに浴室に向かう。晴子は首すら動かさなくなった藍を見
下ろし、

「さあ、先生、私が手伝ってあげる。服を全部脱ぎましょうね」
と耳元で囁く。

（雅！）

藍の目尻から僅かに涙が零れた。

第十三章 急接近の二人

貞操の危機。小野藍は生まれて初めてそれを感じていた。

（姫巫女合わせ身は、処女だからなせる術って思っていたけど、それは先人達が一族の女性を守るために考えた嘘だってお祖父ちゃんに聞いた……）

例え辱められても、姫巫女流は大丈夫。藍はそう思う事にした。そして必ず、雅が助けに来てくれると信じる事にした。

「あらあ、先生ったら、結構おっぱい大きいのね」

本多晴子は、藍のシャツのボタンを外しながら言う。

「へえ、そうなんだ」

浴室から、バスローブを羽織ったならくぼ みよし櫛久保美好が出て来た。

「櫛久保さん、先生の服、脱がせてあげて」

晴子は嫌らしい笑みを浮かべて言った。

「おう」

美好は齒を剥き出しにして笑い、藍に近づいた。

一方、剣志郎はまだホテルの入り口で迷っていた。

（藍がこんなところにいる訳ないよ）

立ち去りかけた彼を、

「おい、お前」

と呼ぶ声がした。剣志郎はギョツとして振り返った。

「こっちだ、こっち」

声のする方へ入って行くと、そこには遠野泉進が倒れていた。

「ああ！」

剣志郎は先々月世話になったその老人の顔をすぐに思い出し、駆け寄った。

「どうしたんですか、遠野さん？」

泉進は剣志郎の手を借りて立ち上がると、

「そんな事はどうでもいい。藍ちゃんが危ない。儂を背負ってくれ。案内する」

「え？」

藍が危ない。その言葉に剣志郎はビクツとする。

「わかりました！」

すぐさま泉進を背負う。

「こっちだ」

泉進の誘導で、剣志郎はホテルの中に入って行った。

土御門晴信は、雅の焦りを嘲るように笑い、

「小野楓の生まれ変わりの女が、それほど心配か？」

雅はそれには答えない。漆黒の剣である黄泉剣を出す。

「また同じ目に遭いたいのか、土御門晴信？ 闇の力に頼る限り、お前は俺には勝てないぞ」

雅は剣を下段に構えた。晴信は呪符を放ち、

「それはお前とて同じ。私の力を押しのける事はできても、私を倒す事はできない？」

雅はピクンとしたが、何も言い返さない。晴信の放った呪符が式神に変わる。

「同じ事だ！」

雅は黄泉剣の妖気を建内宿禰のものに同調させる。

「陰陽道とは、光と闇を束ねる流派。すなわち、これに勝る流派はないのだ」

晴信が叫ぶ。雅はギリツと歯を軋ませ、

「戯れ言を！」

と式神を斬る。しかし、式神は再生した。

「何？」

雅は目を疑った。

（どういう事だ？ 何故式神が再生した？）

「お前が妖気の質を変えたのはわかった。だから私も変えたのだ」

晴信はニヤリした。

「……」

雅は再び襲いかかって来た式神を、

「黄泉比良坂返し！」
よもつひらさか

と唱え、異空間に飛ばした。

「その術も、何度も繰り返せぬ事もわかっておる。手詰まりだな、小野雅？」

晴信は勝ち誇ったように言い放った。

藍のシャツは全てボタンを外されて、ブラジャーが剥き出しになっ
ていた。

「先生、いくら教育者でも、もう少しお洒落した方がいいよ。美人
なんだから」

晴子が藍のセンスを笑った。

（うるさいわね！ そんなの、大きなお世話でしょ！）

確かに藍の身に着けている下着は、何の装飾もない白。今時、中
学生でも着けないような類いだ。

「でも、神聖な感じがしていいよ、晴子」

藍の肌の美しさに目を奪われている美好が言った。藍は全身総毛
立ちそうだ。

（こんな奴に……）

また目尻に涙が滲んでくる。

（雅、助けて！）

もう一度、心の中で叫んだ。その時、

「楢久保さん、後はお願ひね」

突然、晴子は部屋を飛び出して行った。美好はキョトンとしたが、
「ヒヒ、晴子の奴、先生があまり奇麗だから、嫉妬したんだよ。可

愛いよな」

したなめず
と舌舐りしながら藍を見る。

「でも、これで二人つきりだ。もう恥ずかしがる事は何もないよ、

先生」

美好はすでに晴子の術で雁字搦めがんにがらにされている。だから、後は自動的に藍を辱めるようにされているのだろう。

（あんたがいる限り、私は恥ずかしいわよ！）

藍は何とか術を破れないかと思ったが、身体が動かせないので、気を巡らせる事もできない。

「さあ、今度は下だね」

美好は藍のパンツのホックを外そうと手を伸ばした。

「藍！」

するとそこへ、泉進を背負ったままの剣志郎が飛び込んで来た。

（え？ 剣志郎？）

藍は思ってもいない登場人物に驚いてしまった。

「何だ、てめえは！？」

美好は剣志郎を見て目の色を変える。そして、背中の泉進に気づいた。

「ああ、ジジイ、てめえ、まだ生きてやがったのか！？」

美好は藍から離れ、剣志郎に飛びかかって来た。

「おっと！」

剣志郎はその突進をかわし、泉進を下ろす。泉進はずっと藍に近づき、自分の着ていた装束の上っ張りをかけた。

（泉進様！）

藍はとうとう泣き出した。とは言っても、声は出せなかったが。

「お前、自分が何をしているのかわかっているのかよ！？」

剣志郎は藍が服を脱がされかけていたのに気づき、激怒していた。

「うるせえ！ てめえには関係ねえんだよ！」

美好はもう一度剣志郎に掴みかかる。

「関係なくないよ！」

剣志郎は美好の腕を取って振り上げる。

「ギエッ！」

そして続けざまに首の後ろを手刀で叩いた。

「うう……」

美好はたちまち気を失い、そのまま床に突っ伏した。

「何考えてるんだ……」

剣志郎は乱れた服装を直しながら、美好を見下ろして呟いた。そして、藍に目を移す。

「大丈夫か、藍？」

しかし、藍は無反応だ。

「どうしたんですか、藍は？」

剣志郎は泉進を見た。泉進は藍を見たままで、呪詛をかけられて、身動きができないばかりか、声も出せなくなっている

「え？」

剣志郎はギクツとして藍を見た。

「その前に、こいつにかけられた術を解くか」

泉進は九字を切った。

りんびょうとうしやかいじんれつさいぜん
「臨兵闘者皆陣列在前！」

その途端、モアツと煙のようなものが美好の身体から立ち上り、消えた。

「これであの娘とのつながりは切れた」

泉進は再び藍を見る。

「藍ちゃんの身体の中に呪詛が埋め込まれている。それを追い出す方法は一つ」

泉進は剣志郎を見た。剣志郎は思わずビクツとする。

「お前の中の竜の気で、呪詛を追い出すのだ」

「ええ？」

剣志郎は仰天した。そして、

「追い出すって、どうやってですか？」

「藍ちゃんに気を送り込むのだ」

泉進は真剣な表情で剣志郎を見ている。

（え？）

今度は藍がギクツとする。

（何言ってるんですか、泉進様？）

「送り込むってどうやってですか？」

剣志郎は訳がわからないらしい。泉進は溜息を吐いて、

「決まっておろう！ 接吻で送り込むのだ！」

「えええ！？」

剣志郎は大声を上げてしまった。

「せ、接吻で、その、あの……」

見る見るうちに顔が茹で蛸のようになってしまおう。藍も驚愕していた。

（泉進様、何て事を！）

しかし、藍にはどうする事もできない。

「早くせんと、呪詛が藍ちゃんと完全に同化してしまうぞ」

泉進が急かす。剣志郎は焦る。藍はビクビクする。

「何をしておる！ 迷っている場合ではないぞ！」

「は、はい！」

剣志郎は決心し、藍に向き直った。

（あ、バカ、止めなさいよ！）

藍は必死に抵抗しようとするが、小指すら動かせない。剣志郎は藍をゆっくりと抱き上げた。

（ああ……）

藍は覚悟を決めた。剣志郎の顔が近づいて来る。

（仕方ないわ。あの時はそうなってもいいって思ったんだもの）

藍は、邪馬台国ツアーで行った九州の病院での出来事を思い出していた。

「うわ！」

その時、いきなり剣志郎の竜の気が暴れ出した。藍の気に近づき過ぎたため、一気に波動が高まったのだ。そのせいで、藍の身体の呪詛が弾き飛ばされて消えた。

「は！」

藍は自分の身体が動かせるのに気づいた。剣志郎は藍が首を巡らしたのに気づき、

「え？」

と思わず手を放したので、

「キャッ！」

藍はそのままベッドに倒れてしまった。

「ちよっと、剣志郎、いきなり放さないでよ！」

藍は起き上がって怒った。すると剣志郎は顔を背けて、

「藍、見えてる……」

と蚊の鳴くような声で指摘した。

「え？」

藍は、泉進のかけてくれた上っ張りが落ちて前が丸見えなのに気づき、真っ赤になった。

晴信は、晴子の策が失敗した事を知った。

（しくじったか……）

雅もまた、藍が淫の気から解放されたのに気づいていた。

「これで集中できるな、お互い？」

雅は晴信を見てニヤリとした。

第十四章 本多晴子の力

小野藍は、シャツのボタンをはめ直すと、背中を向けている竜神剣志郎に声をかけた。

「もう、いいよ」

恥ずかしそうに言う藍。ドキドキしながら振り返る剣志郎。それをやや呆れ気味に見ている遠野泉進。

「ありがとう、剣志郎。助かった」

藍は照れ臭そうに微笑みながら言った。剣志郎は顔を赤くして、「あ、いや、大した事してないから。礼なら、遠野さんに言ってくれ」

藍はそんな剣志郎をクスクス笑いながら見、泉進に視線を移す。

「ありがとうございます、泉進様」

彼女は深々と頭を下げた。泉進は苦笑いして、「結局、肝心の娘を取り逃がしてしまったからな。あまり褒められないものではない」

泉進が娘といったのに反応し、剣志郎が藍を見る。

「娘って、まさか本多晴子か？」

「ええ。あの子、私の先祖の楓様が封じた陰陽師を蘇らせてしまったのよ」

藍の言葉に剣志郎は目を見開く。

「先祖が封じた陰陽師？ 誰だ、それ？」

藍は一瞬うんざりしたが、今までの事を説明した。

「ビルの火事、あいつの仕業だったのか？ 学園の生徒の中にも、近所に住んでいる者達は慌てて家に連絡していたよ。まさか、本多がそんな事を……。それに、その陰陽師の子孫だなんて……」

剣志郎は腕組みをして神妙な顔をした。

「何にしても、娘を止めねばならん。恐らく、つちみかど はるのぶ土御門晴信と合流するつもりだろう」

泉進が言った。藍は頷き、

「行きましょう」

と剣志郎と泉進を見た。

その本多晴子は、晴信のいる場所を目指していた。

（晴信様、もうすぐ私が行きます。待っていてください）

晴子は嬉しそうに走っていた。

（晴信様の御子を私が生めば、この世を統べる方になれる）

晴子の目は血走り、常軌を逸していた。そして彼女の身体中から黒い妖気が漂い始めた。

おの みやび
小野雅は晴信と睨み合ったままである。

「どうした、小野雅？ もう手だてなしか？」

晴信が挑発する。しかし雅は動かない。

（妖気を変質させられては、さっきの攻撃は通用しない。それにしてもこの男、建内宿禰たけしうちの妖気を漂わせているが、奴に縛られている訳ではないのか？）

雅には、その謎がわからず、晴信に仕掛ける事ができない。

「来ぬのなら、私の方から参るぞ！」

晴信は無数の呪符を袂から取り出して両手に持ち、走り出した。

「く！」

雅は晴信との間合いを取るために後退あとずさった。

「臨兵闘者皆陣列前行！」
りんぴょうとうしやかいじんれつぜんぎよう

晴信は九字を切り、呪符を雅に向かって放つ。呪符は鳥のように舞い、雅に向かった。

（これには妖気を纏まとわせていない。普通の式神しきがみか？）

雅は漆黒の剣である黄泉剣よもつるぎを出した。

「それでは式神は斬れんど、雅？」

晴信が嘲笑する。呪符は雅の直前で式神へんげに変化し、襲いかかる。
「はあ！」

雅は立て続けに数体の式神を斬り捨てた。

「無駄よ」

晴信は一瞬ニヤリとしたが、次に瞬間、ギョツとした。

「ぐおおお！」

式神は斬られると同時に異空間に吸い込まれたのだ。

「俺を舐めるな、土御門晴信。同じ事をするはずがないだろう？」

雅はフツと笑って言う。雅は剣に奥義の「黄泉比良坂返し」（よみひらさかがえ）を仕込んだ。だから、剣に斬られた式神は、なす術なく異空間である根の堅州国に飛ばされたのだ。

「どんなものであろうと、この奥義で根の堅州国に飛ばせぬものはない。お前の方こそ、手立てなしだな、晴信？」

雅は剣で晴信を指し、言った。

その頃、傷が癒えて来た藍の祖父である仁斎は、神社の境内にいた。

（土御門晴信。やはりお前はまだ縛られておるのか？）

仁斎は晴信の動きを感じ取っていた。

「まさかとは思うが、奴め、そのような事を企んでおるのか……」

仁斎は齒軋りし、境内を出た。そして、携帯電話を取り出し、泉進に電話した。

「今どこにいる？」

泉進は、藍達と共にラブホテルを出て来たところだった。

「今藍ちゃんとラブホテルを出たところだ」

藍は泉進のその応答にビックリした。剣志郎は蹴躓き（けつまず）そうになった。

「勘違いするな。何を怒っておるのだ？」

泉進は仁斎が憤激しているのを面白がっていた。

「わかった、わかった。彼奴（あやつ）の企みはそれとなく感じてはいる。まあ、休んでろ」

更に怒る仁斎を無視し、泉進は携帯を切って袂にしまった。

「では、行こうか、藍ちゃん」

泉進はサッと駆け出す。老人とは思えない脚力に驚いた藍だが、
「はい」

と続いた。剣志郎は啞然としていたが、

「何してるんですか、そんなところで!？」

という金切り声を聞き、ギョツとして振り返った。するとそこには、
目に涙をいっぱい浮かべた武光^{たけみつ}麻弥^{まみ}が立っていた。

「た、武光先生!」

剣志郎は頭がパニックになりそうだ。

「どうしたんですか、武光せんせ……」

そこまで言いかけた時、ツカツカと歩み寄って来た麻弥の平手打ちが剣志郎の左頬に炸裂していた。

「不潔です! 関係ないとか言いながら、授業の合間にこんなところで小野先生と!」

麻弥は泣きながら怒っていた。剣志郎は何とか弁明しようと思っ
たが、今の状況ではどう説明しても嘘にしか聞こえないとも思えた。
何しろ、自分は紛れもなく、藍と一緒にラブホテルから出て来たの
だから。これをどれほど細かく説明しても、麻弥に聞いてもらう事
はできないだろう。

「これは理事長に報告しますから、そのつもりで!」

麻弥は呆然とする剣志郎に背を向け、そのまま杉野森学園高等部
に戻って行ってしまった。

(理事長に報告するって……)

藍と自分の事をよく知っている安本理事長は、麻弥の報告を鵜呑
みにはしないだろうが、それにしてもまずい。剣志郎は項垂れるし
かなかった。

「ちよっと、どこにいるの? 急いで来てよ。貴方の力が必要なん
だから」

しかし、藍からの連絡でそう言われ、剣志郎は何となく気力が戻

った。

（今は俺の事より、本多晴子の事だ）

剣志郎は路地を駆け出した。

「本当に剣志郎が役に立つんですか？」

藍は携帯をしまいながら、泉進に尋ねた。泉進は大きく頷き、
「もちろんだ。晴信は何故か杉野森学園に入って行かなかった。藍ちゃんが学園内にいるのを知りながら。どうしてだと思う？」

「竜の気、ですか？」

藍はハツとして泉進を見る。泉進はニヤリとして、

「その通り。先程のホテルの件もそうだが、闇の気は竜の気を嫌うようなのだ。と言うより、竜の気を恐れているのだろう」

「だとすれば、剣志郎の気は切り札になりますね」

藍が言うと、泉進は大笑いして、

「案外役に立ちそうだな、あの唐変木は」

「と、唐変木ですか……」

藍は苦笑いした。当たっているかも知れないと思いながら。

「あら、先生にお爺ちゃん。意外に早かったわね」
路地の陰から晴子が姿を現した。

「本多さん！」

藍が近づこうとすると、

「いかん、近づくな」

泉進が藍の腕を掴んで引き止める。そして空を指差し、

「見ろ、あれを！」

「え？」

藍はキョトンとして泉進の指差す方を見た。するとそこには、無数の自転車が浮かんでいた。

「何、あれ？」

藍には理解不能だ。晴子はニヤリとして、

「忘れたの、先生？ 晴信様が封じられていた社にトラックを突っ

込ませたの、私なのよ？」

「く！」

藍はその言葉にイラツとし、晴子を睨む。晴子は高笑いして、
「だから、自転車^{りんぴやうとうしや}を宙に浮かせるのなんて、簡単なのよ！」

と言うと、藍と泉進目^{いんぴやうとうしやかいじんれつざいぜん}がけて自転車^{りんぴやうとうしや}を飛ばして来た。

「臨兵闘者皆陣列在前！」

泉進は九字を切って気を高めると、

「えや！」

と気の塊^{かたまり}を飛ばし、自転車^{りんぴやうとうしや}を弾き飛ばした。

「神剣、十拳劍！」

藍も剣で自転車^{りんぴやうとうしや}を弾く。

「いつまで続けられるかしらね」

晴子はそれを愉快そうに見ていた。

第十五章 晴信と晴子と

小野藍は、宙を鋭い角度で飛翔するたくさんの自転車を剣で弾き飛ばしながら、本多晴子が何を考えているのかを思った。

（彼女は何が目的なの？）

晴子は土御門晴信の子供を産むと言っていた。もしそれが彼女の願いであるなら、それはまた恐ろしい事だ。

（まさかとは思うけど……）

藍は、晴子から微かに感じた妖気が気になっている。

（あれは紛れもなく我が小野家の宿敵である建内宿禰のもの。だとすれば……）

藍は、建内宿禰が晴子の身体を借り、この世に転生しようとしているのではないかと考えたのだ。

（そしてまた、あの陰陽師も、建内宿禰の妖気を漂わせていた）

しかし、先の吉野での戦いで、建内宿禰は根の堅州国ねかたすくにの不文律で封じられたはずなのだ。藍のかつての許婚である小野雅おのみやびが言った言葉を、藍は覚えている。

『これで建内宿禰は絶対に現世には戻れない。根の堅州国の不文律で封じたんだ。あいつがどれほど足掻こうと、戻って来る事は不可能だ』

根の堅州国の不文律とは、「他者の力で根の堅州国に押し込まれし者は、現世に帰る事能わず」というものである。例えば黄泉の国の最高神と言われている建内宿禰でも、その掟に逆らって現世に戻る事はできないはずなのだ。

「先生、もう息が上がっているの？ 年は取りたくないわね」

晴子が嘲るように言う。藍はムツとして、

「うるさい！」

と叫ぶと、襲い来る自転車を次々に叩き落とした。

「キリがないな、藍ちゃん」

気合いで自転車を弾いている遠野泉進は齒軋りして言う。

「いくら落としても無駄よ」

晴子は血走った目で高笑いする。

「藍！」

そこへ竜神劍志郎りゅうじんけんしろうが駆けて来た。

「くっ！」

晴子は劍志郎の竜の氣に気づき、忌ま忌ましそうに彼を睨む。

「邪魔者が……」

劍志郎が藍と泉進に近づくと、二人の氣が高まった。光の氣の相乗効果である。

「え？」

藍と泉進の動きが急に速くなったので、劍志郎はビクツとしてしまった。

「臨兵闘者皆陣列前行！」
りんぴょうとうしゃかいじんれつぜんぎよう

晴子は早九字を切り、呪符を放った。するとその呪符が変化へんげし、式神しきがみになった。

「式神まで操るのか!？」

泉進が仰天する。

「じゃあねえ、先生、お爺ちゃん」

晴子はニヤリとし、駆け去ってしまった。

「な、何だ、あれは？」

劍志郎は迫り来る式神に驚愕し、後退あとずさった。

「はあ！」

藍が素早く対応し、式神を斬り裂く。

「本多さん！」

すぐさま晴子を追おうとするが、

「藍ちゃんは雅のところへ急げ。敵が何やら始めたらしい」

泉進の言葉にギョツとして足を止める。雅の名を聞き、劍志郎もギクツとした。

「わかりました、泉進様」

藍は剣を地面に突き立て、柏手を打った。

「高天原に神留ります、天の鳥船神に申したまわく！」
たかまがはら かんづま あま とりふねのかみ

藍は光に包まれ、飛翔した。

「わあ……」

それを呆けたような顔で剣志郎が見ていると、

「儂らはあの娘を追うぞ。陰陽師と合流させてはならんからな」

と泉進が告げる。剣志郎はハッと我に返り、泉進を見た。

「行くぞ」

泉進が走り出す。その速さに剣志郎はまた呆けそうになったが、

「ま、待ってください！」

と慌てて追いかけた。

雅と晴信は、睨み合いを続けていた。

「どうした？ 何故仕掛けて来ない？ 俺が怖いのか？」

雅が挑発する。しかし晴信は、

「愚かな。何故、わからんのだ。我ら陰陽道が栄える事こそが、この国のためになるという事が。私に逆らう事は、天命に背くと同じ」と言い放った。

「何が天命だ！ 闇の魔物の力を借りてここまで生き永らえ、その上闇を利用して神道を滅ぼすなど……。それが天命とは、聞いて呆れる」

雅も負けずに言い返す。その時、二人は藍の接近を知った。

「来るか、小野楓の転生……」

晴信は、そうではないと自分に言い聞かせながらも、楓を恐れていた。そして、楓すら極めていない姫巫女流の奥義を会得している藍も恐れていた。

（だが、私の悲願は日の本の国の神道を滅する事。そして再び、陰陽道の世を築く事。ここで倒れる訳にはいかぬ）

晴信の目が怪しく光る。

（こいつ、やはり藍を恐れているのか？ そして、藍の前世である

小野楓を)

雅は晴信を睨みつけ、剣を下げる。

(だが、何かおかしい。この男、本当に建内宿禰の呪縛から解放されたのか?)

雅はその謎を解きあぐねていた。

飛翔する藍は、雅と晴信の凄まじい気のぶつかり合いを感じていた。

(実際に打ち合っていないけど、凄い……)

やがて彼女の視界に雅と晴信の姿が入った。

「雅!」

藍が叫ぶ。雅がその声に反応して彼女を見上げた。晴信も鋭い目で藍を見上げている。

「来たか、宗家の小娘。待っていたぞ」

晴信は何故かニヤリとした。

その頃、小野仁斎は、晴信が封じられていた社の前にいた。

「やはり、そういう事か」

仁斎は眉間に皺を寄せ、社を見上げた。社からは、禍々しい妖気が間欠泉のように吹き上げている。

(あの陰陽師を封じた結界を破る事によって、現世と根の堅州国が融合し始めている。何という事だ……)

仁斎の額を汗が伝わった。

(げに恐ろしきは、建内宿禰の執念よ。まさかその手で来るとはな)

仁斎は小野神社へと歩き出す。

「我が代で小野宗家を滅する訳にはいかぬ」

仁斎は早足で神社を目指した。

一方、泉進と剣志郎は、晴子を追って、路地を走っていた。
「こっちだ」

交差点に來ると、泉進が素早く晴子の行き先を読み、角を曲がる。

「はい！」

劍志郎はヘトヘトになって泉進を追っている。

（さすが、修験者だな。全然疲れていないぞ）

泉進の壮健ぶりに劍志郎は仰天していた。

「ここは……」

二人が辿り着いたのは、その辺りでは有名な神社だった。

「やはり、彼奴の目的は、神社であつたか」

そこは、明治の世に晴信が呪殺した神道家がいた神社である。

「もしかすると……」

泉進は袂から地図を取り出した。

「どうしたんですか、泉進さん？」

劍志郎が呼吸を整えながら、覗き込む。

「あの娘、小山舞が成し遂げられなかった東京の靈的破壊をなそうとしておる」

「小山舞!？」

劍志郎はゾツとした。かつて自分が計らずも助けてしまった藍にそっくりな女の事を思い出して。

「豊国一神教のやろうとしていた事は、元を辿れば、建内宿禰のやろうとしていた事」

泉進は地図を袂に戻し、歩き出す。

「どういう意味ですか？」

劍志郎が追いかけているが尋ねる。

「すなわち、晴信もあの娘も、建内宿禰の術中という事だ」

泉進は鳥居を潜りながら言った。劍志郎は思わず立ち止まってしまった。

「何だ、寝ていなかったのか？」

泉進は仁斎からの電話に出た。

「当たり前だ。小野宗家の一大事に、布団の中で震えておれんわい！」

仁斎の怒鳴り声が、受話口から聞こえる。

「何にしても、黒幕は建内宿禰だ。儂は今裏鬼門を支える神社の一つに來ている」

泉進が辺りを見回しながら告げた。

「儂はもう一つの要に向かう。とにかく、そこは何としても守ってくれ、泉進」

「言われるまでもない」

泉進は携帯を切り、袂にしまう。

「さて、これからが本番だぞ、竜の子りゅうよ」

泉進は剣志郎を見てフツと笑った。剣志郎は「竜の子」と呼ばれ、キョトンとした。

第十六章 黒い妖気

姫巫女流古神道小野宗家現当主である小野仁斎は、東京の靈的破壊を防ぐため、鬼門を守る神社の一つにタクシーで向かっていた。

(土御門晴信が目論むのは、明治の世に宮司を殺害した神社の完全滅失。だとすれば、ここだ)

仁斎が訪れたのは、小野神社から数十キロメートル離れたところにある江戸時代から続く神社である。今では、お参りする者もほとんどいないくらい寂れており、宮司もいない。他の神社の宮司が兼任している状態である。何故そんな事になっているのかというと、晴信の伝承があるからなのだ。

「代を継ぐ者は、死ぬるなり」

誰が言い始めたのかは、今となってはわからないが、そんな迷信のような話があり、跡継ぎがいなくなってしまった。明治期には、何かと政府が目をかけてくれたのだが、やがて戦争の影が日本全体を脅かすようになると、見捨てられ、朽ちるに任せるほどになってしまったのだ。それでも、小野宗家最大の功労者である小野楓が存命の間は、

「土御門晴信の社を封ずる礎の一つ」いしずえ

といい、小野宗家の次の当主となった亮斎にその神社の守護を命じたので、完全に消失する事はなかった。関東大震災の時も、東京大空襲の折りも、火災を免れたのである。楓は、昭和初期まで存命したが、死の間際まで、遠く出雲の地から、東京の行く末を案じていたという。

(ここにはまだ何も仕掛けてはいないようだな)

仁斎は、神社に異変を感じなかったので、ホッとした。

「泉進、何としても止めてくれよ」

仁斎は南西の方角を見上げ、呟いた。

遠野泉進とおのせんしんと竜神剣志郎りゅうじんけんしろうは境内を進み、拝殿に近づいた。

「誰もいないんですね？」

剣志郎は辺りを見回しながら言う。泉進は拝殿を見上げて、「ここはかつて土御門晴信が焼き打ちをかけた神社。そして、東京の霊的安定に寄与している場所だ」

「そう、ですか」

剣志郎も拝殿を見上げる。すると、

「わあ、もう来たんだ。さっすが、遠野泉進のお爺ちゃんね」と、本多晴子の声が聞こえた。

「本多か？ バカな真似はよせ。出て来い」

剣志郎が怒鳴った。

「竜神先生、私、先生の事、嫌いな」

「はあ？」

そんな事を何故言い出す、と思いつながらも、生徒に「嫌い」と言われて、剣志郎はちよつとだけショックを受けた。

「先生ったら、小野先生の事が好きなくせに、武光先生と付き合ったりして、優柔不断なんだもん」

「え？」

晴子からそんな事を言われるとは思っていなかったもので、剣志郎は仰天した。嫌な汗が噴き出す。

「何だ、お前、藍ちゃんを振ったのか？」

泉進までそんな事を言い出す。

「違いますよ！」

剣志郎はもうここから逃げ出したくなった。

「でも、その方がいい。竜神先生には、小野先生に近づいて欲しくないから」

晴子は拝殿の裏から姿を現した。

「どうしてだ？」

泉進はわかっていながら敢えて尋ねた。晴子はニヤツとして、「だって、竜神先生の竜の気、邪魔なんだもん」

「やはりそういう事か」

泉進は素早く早九字を切る。

りんびょうとうしやかいじんれつさいぜん
「臨兵闘者皆陣列在前！」

泉進の渾身の気の塊が、晴子に向かった。

「まあ、怖い」

晴子は呪符を制服のポケットから取り出し、投げ上げた。

きゆうきゆうによりつりよう
「急急如律令！」

晴子の呪文に乗るかのように呪符が泉進の放った気の塊に向かい、
式神しきがみに変化へんげした。

「ぐおお！」

式神は気の塊と激突し、それを止めた。

「やるな、小娘。しかし、そんな事で止められはしないぞ」

泉進はニヤリとした。すると気の塊が膨張し、式神を飲み込んでしまった。

「何！？」

それは晴子には予想外だったらしく、彼女はバツと身を翻すと、
駆け出した。

「もう逃がさんぞ、小娘！」

泉進はフツと息を吐き出した。その息はいくつかの小さな塊になり、晴子を追った。

「きゃっ！」

晴子はその気の塊に足をすくわれ、倒れてしまった。

「あ……」

剣志郎は、その時、見るつもりはなかったが、晴子のスカートの
中を見てしまった。

「何を喜んでいるのだ、助平教師が！」

泉進にそう言われて、剣志郎は赤面した。

「エッチ！」

晴子はそう捨て台詞を吐き、更に逃げようと立ち上がったが、
「かあっ！」

泉進の壮絶な気合いと共に放たれた金縛りの術で動けなくなった。
「くう！」

晴子はとても学園一の才女とは思えないような形相で術を解こうともがいた。

「無駄だ。お前如き小娘に解けるほど、我が術は軟弱ではない」

悔しそうに自分を睨みつける晴子に近づきながら、泉進は、

「この娘を縛るぞ。手伝ってくれ」

と剣志郎に声をかけた。しかし、何の応答もない。

「返事くらいせんか！」

ムツとして泉進が振り返ると、地面に倒れている剣志郎とそれをニヤツとして見下ろしているならくぼ みよし櫛久保美好がいた。その右手には木刀が握られている。

「貴様、どうして？」

晴子の術を全部断ち切ったはずなのに、美好はまだ彼女のために動いている。泉進には理解ができない。

「甘いよ、お爺ちゃん。櫛久保さんは、心の奥底まで、私の僕しもへなのよ」

晴子の声がする。泉進がもう一度晴子を見た時、彼女は術を抜け出していた。

「邪魔しないでね、お爺ちゃん」

泉進の頭に木刀が振り下ろされた。

「ぐう……」

泉進は地面に倒れ、気を失った。晴子はそれを見て見やりとし、「バカねえ。私は晴子様のために動いているのではないのよ。本当はあの方のために動いているの」

晴子は口からどす黒い妖気を吐き出し、同じく口から妖気を吐き出している美好を従えて、拝殿の裏に消えた。

小野藍は、おの みやび小野雅の隣に降り立った。

「土御門晴信、貴方の事、許さない！」

藍は飛翔しながら、姫巫女流の究極奥義である姫巫女二人合わせ身をなしていた。

「ぬ……」

晴信は藍の背後に二人の倭の女王を見てまた身じろいでしまう。

（この娘自身の力は、楓には遠く及ばぬ。恐るる事はなし）

晴信は袂から呪符を取り出し、自分の頭の中から楓に対する恐怖心を追い出す。

「自分の子孫を巻き込み、百四十年も経ってこの世に甦るなんて……」

藍は両手に持つ神剣を重ね合わせる。

「姫巫女の剣！」

二つの神剣が重なり、より強く輝く。

（あのような術、見た事がない。やはり……）

しかし、否定する。

「ほざくな！ 勝つのは私だ！」

雄叫びを上げ、晴信は呪符を藍に投げつけた。たくさんの式神が現れ、襲いかかる。

「斬！」

藍が姫巫女の剣を一振りすると、その剣先から光が放たれ、式神を一瞬にして消し去った。

「無駄だ、土御門晴信。藍の究極の剣の前では、式神など只の紙切れ」

雅が言った。

「それはどうかな？」

晴信はフツと笑い、後退る。あとずさ

「逃がさない！」

藍が間合いを詰めようとするが、それに合わせるように晴信は下がった。

（何だ？）

雅は晴信の動きを不審に思った。

（何か企んでいるのか？）

彼は晴信を睨んだ。

「はあ！」

晴信はまた呪符を投げ、式神を出した。

「無駄よ！」

藍はそれをあっさりと斬り捨てた。

（おかしい……。奴は退いているが、あの余裕のある顔は何だ？）

雅は、晴信の笑みが虚勢ではないのが気にかかった。

「む？」

しかも、晴信の身体から、黒い妖気が漂い始めている。

（やはり、あいつが出て来ようとしているのか？　しかし、どうやって？）

小野宗家の宿敵であった建内宿禰たけしうちのすくねが、死の国である根の堅州国ねのかたすくにから出て来られないのは、誰よりも雅がわかつている。

（だが、この妖気の増え方はどうだ？　一体何が起ころうとしているんだ？）

雅の額を汗が伝わった。

第十七章 裏の裏

藍は、怒りのあまり、土御門晴信つちみかど はるのぶの奇妙な行動に気づいていなかった。

「逃げてばかりいないでよ！」

更に間合いを詰める藍。余裕の笑みを浮かべたままの晴信。

「いかん！」

二人の戦いを見ていた雅みやびは、晴信の企みを見抜いて叫んだ。
「え？」

藍は雅の声にビクツとして足を止めたが、手遅れだった。

「小野宗家もお前で終しまいだ、小娘」

晴信の顔が狡猾な笑みになる。藍の身体から、二人の倭の女王が弾き出されてしまった。同時に神剣を合体させた秘剣である「姫巫女の剣」も解けてしまい、更に二つに分かれた神剣そのものも消滅してしまった。

（これは、かつて舞バアさんが使った結界だ。気づくのが遅かった……）

雅は全ての術を封じられてしまった藍を見て、齒軋はなはりした。

「どうして……？」

藍は神剣が消えてしまったので、仰天ぎやうてんしていた。

「お前の術は全て他力。よって、我が結界内けいがいに誘いざなえば、その力は失われる」

晴信がニヤリと言う。藍はギクツとして晴信を見た。

（これって、以前大阪で戦った時、小山舞が仕掛けていた結界と同じなの？）

藍は事の重大さに気づいた。汗が背中と額を伝った。

「ようやくわかったようだな？ 今のお前は、只の小娘。何の力も持ち合わせておらぬのだ」

晴信は袂たもとから呪符を取り出しながら言い放った。

「くっ……」

藍は思わず後退りした。あとずさ

「しかし、すぐに殺めたのでは、我が恨みは晴れぬ。じわりじわりと殺めてやろうぞ」

晴信がニツとすると、彼の口の端からどす黒い妖気が噴き出した。

(あれは建内宿禰の妖気？たけしうちのすくね どういう事なの？)

晴信は建内宿禰に操られている様子はない。しかし、彼の身体からは建内宿禰の妖気がずっと漏れ続けている。藍にはその絡繰りからくがわからない。

「藍、奴から離れるんだ！」

雅がまた叫んだ。藍はハッとして晴信から離れようとしたが、結界の外に出る事ができない。

「何、これ？」

見えない壁が行く手を塞いでいるかのようにそれ以上進めない。

「無駄よ。その結界は外からしか通れぬ。中から出るには、それ相應の力が要る。だが、今お前にはその力はなし」

晴信はニヤニヤしながら藍を見ている。

「はあ！」

晴信が放った呪符が、藍の額、両肩、両手首、腹、膝、足首に貼り付いた。

「う……」

藍は呪符によって動きを封じられてしまった。

「くそ！」

雅は根の堅州国ねかたすくにに入り、結界の中に入ろうとしたが、できなかった。

(どういう事だ？ 椿との戦いの時、椿の結界の中には入れた。それなのに奴の結界の中に入れない……)

雅の額にも汗が伝った。

(何故だ？)

雅は必死に考えた。

（何かある……。それは何だ？）

焦りばかりが募って行く。

「小野雅、貴様はそこで好いた女が朽ちて行くのを見ているがいい」
晴信は雅を睨みつけ、高笑いした。

「朽ちて行く？」

その言葉に、藍と雅はほぼ同時にギョツとした。

「うう……」

藍の身体に貼り付いた呪符が少しずつ藍の体内に溶け込んで行く。
呪符は溶けながら妖気を噴き出して行く。

（何なの、これは？）

藍は悶絶しそうな痛みを感じているが、身体が動かせないので余計に苦しくなる。全身から汗が噴き出し、痛みで気が遠くなりかけた。

その頃、仁斎は連絡が取れなくなった遠野泉進の身を案じ、タクシーで泉進がいるはずの神社に向かっていた。

（死んではおらんようだが、危ない状態だな）

仁斎は窓から空を見上げ、

（東京の守りが崩れれば、奴の野望は現実のものになってしまうぞ）

仁斎は運転手を見て、

「そこを右だ」

と言い、腕組みをした。

（歯痒いな。藍のように空を飛べれば良いのだが……）

仁斎はもう一度空を見た。

そして、泉進と剣志郎を倒した櫛久保美好は、本多晴子と共に神社の拝殿に呪符を貼っていた。

「この神社の守りを破れば、あの方が戻っていらっしやるのよ」

晴子は恋人が帰って来るかのような嬉しそうな表情で言う。

「君達、そこで何をしているんだ？」

近所の人の通報があつたのか、制服警官が三人拝殿の裏に現れた。他の二人は、殴り倒されている泉進と剣志郎の容体を確認し、救急車を手配していた。

「うるさいわね。邪魔しないでよ、おまわりさん」

晴子は容赦なく呪符を投げつけ、式神で警官三人をたちどころに殺してしまった。

「ぐぎゃああ！」

警官の遺体は式神が食い尽くした。もはや彼女の操る式神は黄泉の魔物と変わらなかった。

「どうした？」

叫び声を聞きつけ、残りの二人の警官が駆けつけた。

「まだいたの？ 邪魔するんじゃないわよ」

晴子が再び呪符を投げつけた。それが式神に変化し、腰を抜かした二人の警官を食い殺そうとした時、

「はあ！」

拝殿の向こうから光の筋が一閃し、式神を斬り裂いた。

「何？」

晴子はそれを見てビクツとした。

「恐ろしい事だ。あの男の末裔でなければ、このような事をするはずもない只の少女であつたろうに」

光り輝く剣を構えた仁斎が建物の陰から現れた。

「もうこれ以上の所業は許さぬ」

仁斎は晴子を睨みつけた。晴子はニヤリとして、

「ふーん。小野先生のお祖父ちゃんなんだ？ さすがねえ」

と言いながら、後ろに控えていた美好を見る。美好は晴子にゆっくりと頷き、進み出た。

「おらあ、ジジイ！ 余計な事すると、ぶっ殺すぞ！」

美好は木刀を振り上げて仁斎に突進した。

「欲が顔に溢れ出ているような馬鹿者に何ができるか！」

仁斎は剣を地面に突き立て、フーッと気を高めて行く。

「うるせえんだよ!」

目を血走らせ、美好は仁斎に木刀を振り下ろした。

「愚か者が!」

仁斎は木刀を素早くかわし、美好の懐ふところに飛び込むと、

「でやっ!」

と掌底しょうていを腹に見舞う。

「ぐおお……」

美好が白目を剥く。しかし晴子はニツとした。

「そして、こうだ」

ところが、仁斎は更に右手の人差し指と中指を喉元に突き入れた。

「げほお!」

美好の口から涎よだれが噴き出す。そしてそのまま彼は後ろに倒れた。

「これではまだだな?」

仁斎は晴子の企みを見抜くかのように言った。晴子がビクンとする。仁斎は地面に突き立てた剣を抜き、

「たあ!」

と振るった。剣から発せられた光が美好の身体を貫く。

「ブヘ!」

光が、美好の身体からどす黒い妖気を追い出した。

「く……」

晴子が齒軋はなはだりをする。仁斎はもう一度晴子を見て、

「これでおしまいだ。後はお前だな?」

と言った。

「ちっ!」

晴子は不利と悟ったのか、逃げ出した。

「後は頼んだぞ」

仁斎は腰を抜かしたままの警官に告げると、晴子を追いかけた。

藍の身体に貼り付いた呪符は半分ほど溶け込んでいた。藍は気絶しそうな激痛に耐えている。

「藍……」

目の前で苦しんでいる藍に何もする事ができない雅もまた苦しんでいた。その時、何かが見えた。

（何だ？）

以前に同じ体験をした事を思い出したのだ。

（そうか、辰野神教との戦いの時と同じか？）

雅は、辰野神教の祠に閉じ込められた時の事を思い出した。

（つまり、奴の結界は異空間……）

そこまで気づいた時、雅は別の事に驚く。

「まさか……？」

彼は晴信の結界を見た。

「これは、まさか……」

雅の額を伝う汗が増えた。

第十八章 江戸曼荼羅揺らぐ

小野雅は、土御門晴信の結界の秘密に気づき、更に焦っていた。
（もしそうだとしたら、奴が出て来るという事か？）

雅は晴信を見てから、藍を見た。

（このままでは、藍は確実に姫巫女流の後継者から外れなければならなくなる。どうすればいいのだ？）

雅は、晴信の結界の中の妖気の濃度が上昇しているのにも気づいていた。

「く……」

藍はその身に溶け込んで来ている呪符から漏れ出す妖気によって、激痛を与えられていた。

（気を失いそう……）

妖気による痛みは、藍を苦しめ、疲弊させていた。

（雅……。お祖父ちゃん……）

藍は齒を食いしばって痛みに堪えていた。そんな時でも思い出し、もらえない事を知ったら、竜神剣志郎はさぞかしショックであろう。

（迷っている暇はない）

雅は意を決して根の堅州国ねかたすくにに入った。

「何をするつもりだ、小野雅？」

晴信は雅の行動に気づき、嘲るように笑い、呟いた。

「藍！」

雅は結界の中に入る事ができた。

（やはり辰野神教の時と同様か）

晴信は雅が結界の中に現れたのに驚愕し、

「おのれ！」

と呪符で式神しきがみを出し、雅を襲わせた。

「はあ！」

雅は漆黒の剣である黄泉剣^{よもつゝるぎ}を出し、式神を弾く。そして、

「随分とどす黒い結界だな、土御門晴信？」

と言うと、辺りに漂う妖気を剣に吸い込ませた。剣は禍々しさを増し、一回り大きくなる。

「ぬ……」

晴信は妖気が希薄になったのを感じ、雅を睨んだ。

「お前は建内宿禰^{たけしうちのすくね}から逃れたと思っているのだろうが、奴の執念はその程度ではないぞ」

雅はニヤリとして晴信を見返す。

「何!？」

晴信はその言い様が気に障ったのか、カッと目を見開いた。

「藍、外なる力は使えなくても、お前自身の気は使えるはずだ。光の力で闇を追い出せ」

雅は藍を見て言った。雅は再び襲いかかって来た式神を剣で弾き飛ばした。

「う、うん……」

藍は激痛に堪えながら、雅に頷いてみせた。そして、身体の気の巡りを意識する。

「フーッ」

呼吸が普通にできるようになった。

「ぬ？」

晴信は藍の気が高まるのを感じ、

「そうはさせぬ!」

と呪符を藍に投げつけた。

「無駄だ」

雅が言った。その言葉通り、呪符は藍に届く前に燃え尽きた。そして、藍の身体に溶け込んでいた呪符も外に出され、ポオツと燃えて消えた。そして式神もその光の力で消滅した。

「フーッ」

藍は自分の身体がようやく感覚を取り戻したのを感じ、肩をグル

グル回し、首を左右に振った。

「はあ！」

次に藍は柏手を連続して打った。辺りに神々しい気が満ちて行く。すると周囲の妖気が弾かれ、晴信の結界も揺らいだ。

「く……」

晴信に対抗するために妖気を強めていた雅も、藍の光の勢いに思わず呻き、彼女から離れた。

「はい！」

藍はもう一度大きな音をさせて柏手を打った。その音響と気により、晴信の結界は吹き飛ばされた。

「おのれ！」

晴信は藍と雅から後退り、呪符を袂から無数取り出した。あつさ

「次は破らせぬ！」

数えきれないほどの呪符が宙を舞い、まるで吹雪の如く藍に向かう。その時、晴信の結界によって阻まれていた姫巫女二人合わせ身が復活し、二人の倭の女王が藍に降臨した。更に、神剣二振りも甦り、秘剣である姫巫女の剣も元に戻った。

「土御門晴信、許さない！」

迫り来る呪符の吹雪を藍はたった一振りで消滅させてしまった。

「何！？」

晴信はその様子を見て仰天した。

「はああ！」

藍は剣を上段に構え、晴信に突進した。

「ダメだ、藍！ 今奴を斬ってはいけない！」

苦しそうな息をしながら、雅が言う。

「え？」

藍は思ってもいない事を雅に言われ、彼を見た。雅は藍の光の力が辛いようで、藍を手で制し、

「晴信は建内宿禰の依り代になっている。奴を斬れば、妖気が一気に噴き出し、建内宿禰が出て来てしまう」

「どういう事？」

藍は更に雅に近づこうとした。雅は苦笑いして、
「それ以上近づかれると、俺も死んでしまいそうだ。そこで聞いてくれ」

「え？」

藍は雅の言っている事がわからず、キョトンとしてしまった。

「晴信は根の堅州国の出口にされようとしている」

雅は藍から離れ、晴信を見た。

「何を言っておる？ 私はあの物の怪とは繋がりはない」

晴信は怒りの形相で雅を見た。

「お前がどう思おうとかまわんが、俺の言った事は嘘ではない」

雅は藍から離れたお陰で身体が楽になったのか、晴信を睨み据えて言った。

「戯れ言だ！ 私はあの物の怪の力を取り込み、我が力としたのだ。今は関わりはない」

晴信は雅に反論した。すると雅はニヤリとして、

「ならば、お前のその口の端や鼻の穴から漏れている黒い妖気は何だ？」

晴信はその言葉にギクツとし、自分の口に手を当てる。

「それは奴の妖気だ。お前は骨の髄まで奴に利用されているんだ」

雅は黄泉剣を消し、晴信を指差した。

「……」

晴信は何かに思い当たったようだ。

「おのれ、あの物の怪め、私の呪符に何かを仕掛けたな！」

晴信は持っていた呪符を全て袂から出すと、

「えい！」

と気合いを入れ、全部燃やしてしまった。

「やっとわかったようだな？ 建内宿禰は人を利用はするが、味方にはならない。よく覚えておけ」

雅は晴信を叱りつけるように言い放った。

「以前、お前と同じように、建内宿禰の力を譲り受けた小野源齋は、最後は建内宿禰に身体を乗っ取られ、死んだ」

晴信は、源齋が敗れたのは知っていたが、その事実は知らなかった。

「すごいねえ、お兄さん。そこまで見抜くなんて」

女の子の声が出た。

「本多さん！」

藍は声の主を見て叫んだ。そう、それは本多晴子であった。そして、その後ろから、仁齋が現れた。

「お祖父ちゃん！」

藍はびっくりしていた。

「大丈夫なの、寝てなくて？」

「大丈夫だ。どいつもこいつも、人を病人扱いしおって！」

仁齋は雅に目で合図をした。雅はそれに応じて頷く。

「なるほど、その娘にも妖気が漂っているようだな？」

雅は晴子を見て言った。晴子はニヤリとして、

「そうよ。私は建内宿禰様のためにこの東京を守護している江戸^{エド}マ^マ茶羅^{シダラ}を壊すの」

「何？」

晴信は驚いて晴子を見た。

「お前は我が子孫。我が願いを叶えるためではないのか？」

晴信の言葉に晴子はゲラゲラ笑い出し、

「何言ってるのよ、ご先祖様？ 貴方は一度小野楓と土御門宗家によつて封じられた負け組なのよ。役目を果たしたら、消えて頂戴」

「何だと！？ お前は我が子を産むのではなかったのか？」

晴信が言うと、晴子は身震いして、

「気持ち悪い事言わないでよ、オジさん。そんな訳ないでしょ？」

「私、まだ十八歳よ」

晴信は打ちのめされてしまったのか、何も言い返さない。

「という事だ。建内宿禰は、その陰陽師ではなく、この小娘を使う

つもりだ」

仁斎は鋭い目で晴子を見た。晴子はニツとして、

「さすが、小野先生のお祖父ちゃんね。鋭い！」
と拍手してみせる。

「でも、ちょっとお間抜けね」

「何だと!？」

仁斎はムツとした。藍と雅もハツとして晴子を見た。

「江戸曼荼羅の要はもう崩れるわ。私の仕掛けたトラップでね」

晴子は甲高い声で笑った。

「どういう事!？」

藍が怒鳴った。すると晴子は笑いを堪えながら、

「お祖父ちゃんが調べた時は、まだ呪符は作動していなかったの。
さっき動き出したわ」

「何ですって!？」

藍と仁斎は顔を見合わせた。

「それから、さっきもう一人のお爺ちゃんがいた神社の呪符も、そ
ろそろ動き出すわよ」

晴子は再び甲高い声で笑い出す。

「ほらほら、江戸曼荼羅が壊れちゃうよ、小野先生。何とかしないと」

藍は晴子を憎らしそうに睨み、

「貴女は自分が何をしようとしているのか、本当にわかっているの
!？」

「もちろん、わかっているわよ。東京が破壊され、日本が闇に閉ざ
されるの」

晴子は嬉しそうに語る。藍は齒軋りした。

「ぐお!」

その時、晴信が苦しみ始めた。

「どうしたの？」

藍は晴信に駆け寄った。晴信は膝を着き、

「確かに私はあの物の怪に操られたままのようだ」
と自嘲気味に言った。晴信の口、花、目、耳から妖気が噴き出し始めた。

「始めおったか！」

仁斎が晴信に駆け寄ろうとすると、

「お祖父ちゃんはダメ。邪魔しないでね」
と晴子が式神を出して襲わせた。

「くそ！」

仁斎は素早く十拳剣^{とつかのつるぎ}を出し、対抗する。

「泉進、何をしているのだ!？」

仁斎は遠野泉進に毒づいた。

その遠野泉進は、意識を回復し、救急車を追い返して、剣志郎と共に神社に貼られた呪符を剥がしていた。

「うわっち！」

剥がすと燃える呪符に難儀しながら、剣志郎は奮闘していた。

(藍、頑張ってくれ)

第十九章 晴信の意地

遠野泉進と竜神剣志郎は、本多晴子が仕掛けた呪符を懸命に取り除いていた。

「遠野さん、おかしいですよ。さっきから全然、このお札減っていませんよ」

剥がすと燃える呪符で指先を軽く火傷した剣志郎がぼやいた。

「確かに……」

泉進は、剥がすそばから浮き出て来る呪符に気づいた。

「まやかしか?」

彼は早九字を切った。

「臨兵闘者皆陣列在前!」
りんびようとうしやかいじんれつざいぜん

剣志郎がその大きな声にビクツとする。

「そこか!」

泉進は精神を集中し、晴子が仕掛けた罠を見破った。

「はあ!」

泉進の気が鋭い刃物のように晴子が隠した本来の呪符を切り裂き、消滅させた。

「あの娘、只単に陰陽道に通じているだけではないな」

泉進の額を汗が伝わる。

（儂らはとんでもない誤りを犯しているのかも知れぬ。甦ったのは、
つちみかど はるのぶ土御門晴信ではない。何という事だ）

「どうしたんですか、遠野さん?」

呪符が消え始めたのを喜んでいた剣志郎は、泉進の顔が陰しくなつたのを見て尋ねた。

「急ぐぞ、竜の子よ」

泉進は晴子が駆け去った方へと走り出す。

「待ってください、遠野さん!」

剣志郎は慌てて泉進を追いかけた。

「ぐおおお！」

晴信は身体中から黒い妖気を噴き出し、悶絶していた。

「そうよ、ご先祖様。貴方のお役目は、建内宿禰様の糧たけしうちのすくねなのだから、もつと踏ん張りなさい」

晴子はけたたましい笑い声をあげ、言い放つ。

「本多さん！」

藍は晴子を睨みつけるが、晴子はそんな藍の視線を気にも留めていない。

「む？」

晴子の笑い声が止む。

「あのジジイ、私のトラップを破ったの！？」

晴子は憎らしそうに泉進達がいる方角を見た。すると仁斎が、

「先程偉そうな能書きを垂れておったようだが、鬼門の守りも破れはせんぞ。姫巫女流の結界を舐めるでないわ、このヒョッコめ！」

と怒鳴った。晴子は一瞬、ビクツとしたが、

「そんなはずはない。建内宿禰様のお力は確実に強まっている。私達の勝ちよ」

と言いつ返した。

「確かに、奴の気配が強くなっている」

雅が呟く。その言葉に藍がギョツとした。

「でも、建内宿禰は、もう二度と現世には出て来られないんでしょ？」

彼女はさすがのような目で雅に尋ねる。雅は藍を見て、

「その通りだ。奴は絶対に現世には戻れない。現世にはな……」
と悔しそうに歯軋りした。

「どういう事？」

藍は仁斎を見た。仁斎は藍を見て、

「雅の言葉通りだ。奴は現世には出て来られない。しかし、根の堅州国にならどこでも自由に行ける」

「え？」

藍は仁斎の話聞き、ある事に思い至った。

「まさか……」

悶絶している晴信の周囲の空間が、僅わずかずつ歪んで行くのがわかった。

「ぬうう……」

晴信にも、その変化はわかっていた。

「おのれ、物の怪め、私を黄泉と現世とを繋ぐ筒にするつもりか！？」

苦しそうに息をしながら、晴信は晴子を睨んだ。

「今ごろ気づいても遅いわよ、ご先祖様。大人しく建内宿禰様の糧になりなさいよ」

晴子はニヤリとして言った。

「江戸曼荼羅が崩れなくても、あの方はお戻りになるわ。それは誰にも止められないのよ」

と晴子は仁斎と藍を睨みつける。

「ここまで進んでしまったか」

そこに泉進と剣志郎が駆けつけた。

「仁斎、お前がいて、何をしておったのだ！？」

泉進が仁斎に怒鳴った。

「うるさい！ 今から何とかするのだ。手を貸せ」

仁斎は懷さかきから櫛を取り出した。

「東京は、多摩山中から東京湾沖まで、我が小野宗家の結界に守られている。先日のの小山舞の騒動以降、我が宗家が何もしていないと思っていたのか、愚か者め」

仁斎は、晴子の背後に蠢く建内宿禰の気配に向かって言った。

「お前の企みは見切った。これより更なる結界を張り、お前の野望を阻止する」

仁斎は櫛を足下の地面に挿した。

「姫巫女流古神道奥義、黄泉戸大神！」

柵を中心にして網目状に光が地面を走る。

「ふううおお！」

網目状の光は晴信を取り囲む。

「臨兵闘者皆陣列在前！」
りんぴょうとうしやかいじんれつざいぜん

泉進が早九字を切り、晴信を取り込もうとする妖気を遮断する。

「邪魔はさせない！」

晴子が無数の呪符を放り、それら全てを式神にしきがみ変えた。式神は高举して藍達に襲いかかった。

「わあ！」

剣志郎は式神の姿に仰天し、腰を抜かしそうになった。

「剣志郎！」

藍が走り、剣志郎に襲いかかろうとした式神を斬り裂く。

「離れてて、剣志郎！」

藍の言葉は剣志郎の胸に無情に突き刺さった。

「いや、そいつにはいてもらわねば困る、藍ちゃん！」

泉進が怒鳴った。剣志郎は嬉しいような怖いような複雑な心境だ。

「どうしてですか？」

藍が式神を薙ぎ払いながら尋ねる。

「竜の気が必要なのだ」

泉進も九字で式神を倒しながら答える。

「そういう事か」

雅はそれを聞いてニヤリとしたが、

「しまった！」

と別の事に気づいた。

「私の身体を捧げます！ お使いください！」

晴子が絶叫した。彼女の身体から僅かに漏れていた妖気が爆発的に増えた。

「本多さん！」

藍は式神を薙ぎ払いながら晴子に近づいた。

「本多！」

剣志郎がその後にく。

「おのれ……」

晴信は、妖氣に塗れて行く晴子を霞む目で見ていた。

（我が一族は子々孫々に至るまで、建内宿禰に謀られていたのか？）

彼はフツと笑った。

「私は、土御門家の陰陽師。物の怪如きに操られてなるものか！」

晴信は印を結んだ。

「臨兵闘者皆陣列前行！」

彼は自分の身体の中の妖氣を追いつために身の内に九字を打った。

「む？」

その様子に気づいた仁斎は、

「死ぬ気か？」

と呟いた。そして、櫛を地面から抜いた。

「お前の生き様、見させてもらおう」

仁斎は晴信の意地に賭ける事にした。

「くう！」

晴子の身体は妖氣によって傷つき始めた。いたるところに傷ができて、血が流れる。

「このままじゃ、本多さんが死んでしまうわ」

藍は剣を地面に突き立て、晴子に近づいた。

「よせ、藍！ その娘の身体は、根の堅州国と繋がっているぞ」

雅が叫んだ。藍はそれでも晴子を助けようと彼女の身体に手を伸ばした。

「くう！」

晴子の身体を取り巻く妖氣は、容赦なく藍の手を斬り裂く。藍の手は血まみれになった。

「藍！」

雅と剣志郎が同時に叫んだ。

「やめろ、藍ちゃん！ そのやり方ではダメだ」

泉進が藍を晴子から引き離した。

「本多さん！」

藍は涙を流していた。痛みからではない。晴子を思っている。

「晴信が反撃を始めた。ここは奴に賭けるしかない」

泉進は藍を落ち着かせ、そう囁いた。

「え？」

藍は涙で濡れる目を晴信に向けた。

りんびょうとうしやかいじんれつぜんぎょう
「臨兵闘者皆陣列前行！」

晴信の早九字が続く。それは確実に妖気を祓い除けていたが、同時に晴信自身を傷つけていた。

「ふうう……」

晴信の九字に影響されたのか、晴子の妖気が抑えられて行く。

「今だ！」

泉進が素早く動き、晴子の身体に気を送り込む。

「くあああ！」

晴子が雄叫びをあげる。身体の中の妖気が押し出されるのに伴う痛みのせいだ。

「本多さん……」

藍は駆け寄った剣志郎に支えられ、晴子の様子を見ていた。

「この子はまだ戻る！ 何としても救う！」

泉進は気を送り、妖気を弾く。

「力を貸せ、竜の子。この子は、お前の生徒なんだろう？」

「え、あ、はい！」

剣志郎は藍が倒れそうなのを気にしたが、

「大丈夫。泉進様を助けて」

藍が微かに笑みを浮かべて言ったので、

「すまん」

と藍を座らせ、泉進に駆け寄った。

「儂の背に触れよ。そして、お前の気を送り込んでくれ」

「どうすればいいんですか？」

剣志郎にはその術がわからない。

「とにかく、この子を救いたいと念じろ！　それだけで良い！」

「は、はい！」

剣志郎は泉進の背中に右手を当て、

「本多！」

と念じた。その途端、彼の身体から竜の気が放出され、泉進を通じて晴子に伝わった。

「ぎゃ！」

一瞬、晴子は痙攣したようになったが、彼女の身体から妖気が弾き飛ばされ、身体にできた傷も消えた。

「……」

晴子が妖気から解放されたのを知り、晴信はフツと笑った。

第二十章 建内宿禰

泉進と剣志郎は、本多晴子が元に戻ったのを見てホッとした。

「何とか手遅れにならずにすんだか」

泉進はゆっくりと晴子を地面に寝かせた。

「えーい！」

彼は早九字を切りながら気合を入れ、晴子の身体の穢れを祓い始めた。

「本多……」

剣志郎は晴子の身体に自分のスーツを脱いでかけた。

（こんな若い子を自分の手駒のように使って……）

剣志郎は建内宿禰たけしうちのみくねに激しい憤りを感じていた。彼の中の竜の気が大きくうねり始める。

「ぬ？」

自分の中の妖気を追い出すために九字を切っていた土御門晴信つちみかど はるのぶは剣志郎の変化に気づいて彼を見た。

（これは……）

晴信は九字を切るのをやめ、
きめうぎゆうによりつりよう

「急急如律令！」

と剣志郎を気で攻撃した。

「うわ！」

剣志郎はそれを全くの無防備で食らってしまい、地面に叩きつけられた。その途端、竜の気がその敵意を晴信に向け、剣志郎から離れた。

「何事だ？」

泉進、仁斎が晴信を見る。

「何するの！？」

藍はよろめきながら叫んだ。雅は晴信の突然の行動を妙に思い、
（どういうつもりだ？）

と晴信を見た。その間にも、竜の気は膨らみ、晴信を威嚇し始めた。

『気づきおったか、晴信よ』

晴信の頭の中に建内宿禰の声が木霊する。

『やはり貴様の仕業か、物の怪め。我が子孫を弄ぶ事もてあそは許さぬ』

晴信も心の声で建内宿禰に返す。藍達に聞かれたくないためだ。

『お前は始めから、我が子孫を依り代とし、現世に甦もるつもりであつたのだな？　そしてあの小野源齋は只の捨て石』

晴信は今にも襲いかからんばかりの竜の気を見上げながら建内宿禰に言った。

『如何にも。源齋程度では私の力は納まり切らぬ。あの娘はお前と私の力を合わせ持つ。とって、私の依り代に相応しい』

晴信は建内宿禰の企みに震えた。恐れからではない。怒りでだ。

『そして、小野の者共が闇の力を封じようとして来るのもわかった上で、我らに妖気を纏まとわせた。そして、仕上げはあの竜の気か？』

晴信は、その陰謀の根幹を知り、今度は戦慄で震えた。

『さて、うぬとの戯れ言は終しまいだ』

建内宿禰はスーッと晴信から離れるように気配を消した。

（何をするつもりか？）

晴信は目の前に迫る竜の気を見上げ、齒軋いさかりする。

（この気と争えば、その諍いさかいから生まれる歪いさみが奴を助ける事になる。如何にすれば良いのだ？）

「何を企んでおるのだ、あいつは？」

仁齋は眉をひそめた。

（あの男を殺すつもりであれば、さっき殺せたはず。それをしなかったのは、何か理由があるのか？）

仁齋は泉進を見た。泉進は剣志郎を助け起こしながら、（どういうつもりだ？　あの娘に向かおうとした竜の気を自分に向かわせたように思えるのだが）

と思っていた。彼にも晴信の考えがわからないのだ。

（もしや……）

雅は、晴信に建内宿禰が近づいたのがわかった。

（晴信は、あの娘を守ったのか。竜の気があの子を攻撃すれば、それは……）

雅は仁斎を見て、

「竜の気を鎮めてくれ。あまり暴れられるとまずい事になる」
「何？」

仁斎は理由を尋ねようとし、ハツとなった。

「そういう事か？」

「そういう事だ」

仁斎と雅の謎の会話を聞いていた藍は、

「どういう事なのよ！？」

と怒鳴ったせいで、フラツとした。

「大丈夫か、藍？」

その藍を剣志郎が支えてくれた。

「あ、ありがとう」

藍は雅が仁斎と話しているのを確認しながら、剣志郎を見た。

「あいつ、死ぬ気かも知れない」

剣志郎はそう言って晴信を見た。

「どういう事？」

藍は剣志郎の腕を振り払いながら尋ねた。すると剣志郎は苦笑いをして、

「いや、何となくそう思えただけ。さっき、あいつにはね飛ばされた時、そんな感じがしたんだ」

「ふーん」

藍は頷きながら、晴信を見た。

「これ、巻いとけよ」

剣志郎は藍に皺くちななハンカチを差し出した。

「あ、ありがとう」

藍は苦笑いしながらそれを受け取り、傷ついた右手に巻いた。

「泉進、手を貸せ。竜の気は奴の呼び水だ。抑えないと、彼奴が出

て来てしまう」

「わかった」

二人の老人はそれぞれの術を駆使し、竜の気を抑えにかかった。

「黄泉戸大神！」
よみどのおおかみ

「臨兵闘者皆陣列在前！」
りんびようとうしやかいじんれつざいぜん

二人の術が、竜の気を押さえ込もうとする。竜の気はそれに反発し、動きを活発化させた。

「はあ！」

「ふおお！」

仁斎と泉進は更に力を込め、術を強化した。すると晴信が、

「余計な事をするな！ それは私の獲物だ」と怒鳴る。

「何を言っておるか！ 今はそのような事を言い争っている場合ではない！」

泉進が怒鳴り返した。

「そうだ。何を考えておるのだ、お前は！？」

仁斎も同調し、晴信を睨んだ。

「今更何を言っているんだ、あいつは？」

雅は晴信の言葉を不審に思った。

（何かあるのか？）

彼は辺りを探った。

（確かに先程まで建内宿禰は晴信に憑いていた。しかし、今はその気配がない。どういう事だ？）

「愚か者め、この謀に気づかぬのか！？」
はかりごと

晴信が更に大声で言い返した。

「何だと？」

仁斎と泉進は顔を見合わせた。その時だった。

「黄泉路古神道奥義、黄泉比良坂越え」
よみじ こしんどう よみひらさか

いつの間にか立ち上がった晴子が、黄泉路古神道の奥義を唱えていた。

「しまった！」

雅はようやく建内宿禰の企みの全容に気づいた。

（それか……。その手があったか……）

晴子は妖気を全く纏っていなかった。まさにそれこそが建内宿禰の罠だったのだ。

（一旦妖気が消えてしまえば、俺達はそのから目を離す。それが狙いだったのか。そして、あの舞バアさんと小山隆慶が使った奥義……）

雅は齒軋りした。

（知っていながら、そこに気づけなかったとは……）

藍は晴子の異変に目を見張り、

「本多さん！」

と地面に突き立てた剣を引き抜き、晴子に近づく。

「何、これ？」

晴子の周りの空間が歪み、どす黒い妖気が渦巻き始めた。

『藍よ、剣で斬りなさい』

倭の女王の一人、卑弥呼が言った。

「はい！」

藍は剣を正眼に構え、気を高める。

「ふおお！」

黄泉比良坂越えの生み出す疑似黄泉の国の中で、晴子が雄叫びをあげる。

『ようやく戻れる』

建内宿禰の身の毛もよだつ声が聞こえた。

「くそ！」

雅は何もできない自分に腹を立てた。

「そういう事か」

仁斎と泉進も術を解き、藍の応援に回ろうと走り出す。同時に竜の気も、強大な闇の気の出現に気づき、晴子へと動き出した。

（このままでは、我が子孫が危うい）

晴信は押さえ込んでいた妖気を解放した。一気に膨れ上がった妖気は、晴信の容貌すら一変させた。もはや晴信は人ではなく、黄泉の魔物のようになってしまった。

「はあ！」

晴信は妖気を使い、散った式神を再生させた。そして、

「黄泉醜女^{よもつしめ}！」

と黄泉路古神道の奥義を使い、黄泉の魔物を出し、式神と融合させる。

「物の怪め、お前の思い通りにはさせぬぞ！」

晴信の怒りが広がる。彼は式神を黒い剣に変化^{へんげ}させて持った。

「あれは？」

晴子を救い出そうと黄泉比良坂越えが作り出した異空間を剣で斬っていた藍は、晴信の変貌に気づき、ギョツとした。

「どうとう行ってしまったか？」

仁斎は晴信の姿を見て呟いた。

「もし晴信蘇りし時、人であれば救い、物の怪であれば滅せよ」

先祖の小野楓と共に晴信を封じた土御門家最後の当主である晴栄が遺した言葉である。

「滅さねばならなかったか」

仁斎は悲しそうに晴信を見た。

（晴信は、楓様に思慕の情があったという。母を知らぬ晴信にとって、楓様は一体どんな存在に見えたのであろう？）

『ほう。晴信よ、覚悟ができたか。ならばこちらに来い』

建内宿禰の声が囁く。晴信はバツと飛翔すると、竜の気を剣で弾き飛ばし、晴子のそばに舞い降りた。

「く……」

晴信が加わったせいで、異空間の守りが強くなり、藍は剣を弾かれた。

（どういふつもりなの、土御門晴信？）

藍は晴信を睨み据えた。

第二十一章 黄泉比良坂

雅は、妖気を一気に高めた土御門晴信を見て、
つちみかど はるのぶ

「子孫のために我が身を犠牲にするか……」

彼は晴信が自分と重なる気がした。

（守るべき者のために自ら滅びの道を選んだのか？）

雅は晴信を哀れんだ。そして、自分自身も晴信とさして変わりのない立場にある事に思いを致した。

（黄泉路古神道^{よみじ こしんどう}を修得した者が辿る道だ）

雅は、小野源齋や小山舞達と戦った頃より、自分が強くなった事を感じている。同時に、身体の中を巡る妖気も多くなって来ている事にも気づいていた。

（以前は、藍が光の力を使っても、苦しくなる事はなかった。俺自身、確実に闇に取り込まれているという事か）

皮肉を感じた。もし、黄泉路古神道に手を染めていなければ、藍の許婚であつたろう。^{いいなすけ}そして、あの京都小野家の椿も死ぬ事もなかったかも知れない。だが、それ以上に小野源齋の野望を阻止し、その背後で蠢いていた建内宿禰^{たけしうちのすくね}を根の堅州国^{かたすくに}に押し戻す事ができなかったらう。そして、両親の仇である小山舞の企みを打ち碎けなかったかも知れないのだ。

（どちらにしても、後悔はない）

雅はこのまま闇に呑み込まれ、朽ち果てても良いと思っていた。

「だが、晴信、それでは奴に力を貸すだけだぞ」

雅は過去の思い出を振り払い、叫んだ。

「黙れ。お前如きに何がわかる。私はあの土御門家の者である。このまま、我が子孫を闇に落とす訳にはいかぬ！」

晴信は晴子の腕を掴むと、結界の外に放り出した。

『何をするか、晴信！？』

建内宿禰の声が轟く。すると晴信はニヤリとし、

「黄泉の入り口を開かせはせぬ。お前はこの私と共に闇に帰るのだ、物の怪！」

と言いつ放った。

「本多さん！」

藍が剣をベルトに差して晴子に駆け寄る。晴信に放り出された晴子は、地面に倒れ伏していた。

「こっちへ」

泉進も駆け寄り、二人で晴子を結界から離れたところに運んだ。

「本多」

竜の気が身体に戻った剣志郎は、躊躇いながら晴子に近づいた。

「心配せんでいい。この子には妖気はない。近づいても何も起ころんよ」

泉進の言葉にホツとし、剣志郎は晴子に歩み寄った。

「この嬢ちゃんはお前に任せる。これから儂と藍ちゃんは、いよいよ化け物退治だ」

泉進は先程より濃度を増している結界内の妖気を睨みつけて立ち上がる。

「そ、そうですか……」

剣志郎は泉進を見上げた。

「行くぞ、藍ちゃん」

「はい、泉進様！」

藍と泉進は、黄泉比良坂越えが作り出す結界に向かって走る。

（晴信はあの子を助けるために我が身を犠牲にし、建内宿禰を押さえ込もうとしているのだろうか……）

雅は齒軋りした。

（それこそまさに、奴が思い描いていた通りの結末だ。いや、奴はもしかして、どう転んでもいいように動いていたのか？）

雅は黄泉比良坂に漂う建内宿禰の妖気を睨む。

（何という執念だ……）

雅は建内宿禰の企みの深さに戦慄した。

その頃、剣志郎と藍がラブホテルから出て来たところを目撃してしまった武光麻弥は、理事長室にいた。

「そうですか」

理事長の安本浩一は、興奮して訴える麻弥の話を冷静に聞いていた。

「教育者としてあるまじき行為です。小野先生と竜神先生を厳罰に処してください」

麻弥はいつもの可愛らしさはどこかに忘れてきたのかというくらい、怒りの形相である。

「しかし、小野先生と竜神先生がそのような場所から出て来たという事が、どうにも信じられないのだがねえ、武光先生」

安本の傍らで聞いていた事務長の原田裕二が口を挟んだ。すると麻弥は怒りの矛先を原田に向け、

「私が嘘を吐いているとおっしゃるのですか、事務長!？」

「ああ、いやいや、決してそんなつもりはないよ、武光先生」

原田は麻弥の迫力に気圧されながら答えた。安本は溜息を吐いて、
「いずれにしても、お二人から事情は聞きましょう。それから、処分を考えます」

「そんな悠長な事を仰らないでください、理事長! あの二人は、あんな破廉恥なところで……」

とうとう麻弥は泣き出してしまった。安本は原田と顔を見合わせた。

藍と泉進は、結界を打ち砕こうと剣撃と九字を繰り出していた。

「やめよ! この始末は私がつける。手出し無用だ」

晴信が藍と泉進を睨みつけて怒鳴った。そして、

「はああ!」

と気合いを入れると、更に妖気の濃さを高め始めた。

「凄い……」

雅は啞然としていた。

（やはり、建内宿禰はこの男を最後の切り札としていたのか？ 源齋や舞バアさんとは比べ物にならない）

「雅、見物していても仕方ないぞ。お前も気づいているのであろう、建内宿禰の最後の罠に」

仁齋が雅に近づいて囁いた。雅はハッと我に返って、

「さすがだな。ジイさんも気づいていたのか？」

「わからんのか。あの化け物との関わりは儂が一番長いんじゃない」

仁齋は雅をムツとして睨んだ。

「一度あの娘を使うと見せかけ、本当はこの男が本命。建内宿禰は土御門晴信に本気を出させたかったという事だ。もちろん、晴信が途中で倒れた場合は娘でも良かったのだろう」

仁齋はそう言うのと、晴信を見た。雅は頷いて、

「どうしてこんな回りくどい方法を選んだのかと思ったが、それが狙いだったんだな」

と同様に晴信を見た。

『藍よ、結界の流れを見切りなさい。さすれば斬り込めよう』

もう一人の倭の女王の台与とよが告げる。藍はやや後ろに下がり、

「はい」

と応じた。そして剣を正眼に構え、結界をジッと見つめる。泉進はそれに気づき、九字を切るのを止めた。

「はああ！」

藍の身体の光が剣に集まり始める。光は濃く強くなり、刀身がより輝き始めた。

「ぬう？」

晴信は藍の異変に気づき、彼女を見てギョツとした。

（か、楓？）

晴信の目には、藍と楓が重なって見えた。

「そこ！」

藍はほんの刹那緩くなる結界の間隙を縫うように剣を滑り込ませ、

斬り裂いた。

「うおお！」

結界はそこから解^{ほつ}れ始めた。妖気が噴き出すかと思われたが、藍の振り下ろした姫巫女流古神道最強の剣である姫巫女の剣の光の力が勝り、妖気は破れて消えて行く結界と共に消失して行く。

「おのれ！」

晴信は妖気の消失を補いように更に身体から妖気を繰り出す。しかし、それはまさしく焼け石に水で、藍の放つ光の前には無力だった。

「これは……」

仁斎もまた、藍に楓を見ていた。彼は楓に抱かれて宗家の庭を散策した事がある。その記憶は微かなものだが、その時の楓が放っていたのと同じ穏やかな気を感じたのだ。

（楓様がお力を貸してくださっているのか？）

仁斎はその光景に思わず見とれてしまった。

『何と！』

楓を感じたのは、二人だけではない。建内宿禰もまた、楓を感じていた。

『これは如何なる事ぞ』

藍の後ろにいる卑弥呼と台与。そして楓。

（もしか、この波動は？）

雅は仰天していた。彼は、倭の女王二人と楓の他に椿の気を感じていたのだ。

（椿……）

椿が藍に力を貸しに来てくれた。それを感じ、雅は目を潤ませた。
（楓様……。椿さん？）

藍もまた、彼女達の気を感じていた。

『建内宿禰よ、姫巫女流の強さは人。決して挫けぬ、そして諦めぬ人の思い！』

卑弥呼が叫ぶ。

『滅せよ!』

台与が叫ぶ。

『そのような事が……』

藍の剣が放つ光が、建内宿禰を圧倒し始めた。

『そのような事が……。認めぬうっ!』

光は辺りを包み込み、全てが輝きの中に消えて行く。穏やかに、ゆっくりと。

『おのれえええ!』

建内宿禰の断末魔が聞こえた。やがて、光は小さくなり、戦いの終息を告げた。

「私は……」

晴信の妖気も消えた。彼の容貌は人に戻っていた。

「滅さずにすんだか」

仁斎はホッとしたように呟いた。

エピソード 非常なる掟

土御門晴信は妖氣を喪失し、穏やかな顔になっていた。

「終わったのね」

藍がホッとして呟くと、

「いや、終わってはいない」

雅が言った。藍、仁斎、泉進が一斉に彼を見た。

「どういう事だ？」

仁斎が尋ねる。雅は晴信を見たままで、

「黄泉路古神道を修得した者が妖氣を失うという事は、不老不死の力も失うという事だ」

「何!？」

仁斎はギョツとして晴信を見た。

「おおお!」

晴信自身も、自分の身体の変わりように気づいていた。彼の顔は急激に老い始めた。かつて雅が戦った小山舞が妖氣を消失した時と同じように。皺が寄り、眉は白くなり、髪が抜け落ちて行く。齒も取れた。

「……」

藍はあまりの事に声も出ない。仁斎は齒軋りして、

「そうか。黄泉路古神道の使い手は決してその道から戻る事ができぬのか……」

泉進は厳しい表情で雅を見た。

（雅はそれを承知しながら、藍ちゃんを助けるため、そして自分の両親の敵を討つために黄泉路古神道に手を染めたのか……）

「あのままの方が良かったっていう事なの……?」

藍は目に涙を浮かべ、晴信を見た。すると晴信は、その老いさらばえた顔を藍に向け、

「いや。そのような事はない。私は人として死ぬる事を望む。気に

病むな、小野楓の生まれ変わりよ」

と言うと、弱々しく微笑んだ。藍はその言葉にピクンとした。

「お騒がせした、小野の方々。私もどうか、晴雄様や晴栄様のいらっしゃる天に行けるようだ。かたじけな忝い」

晴信はゆつくりと頭を下げた。その途端、彼の頭が土くれのように崩れ落ち、腕が砂のように細かく散って行く。脚も折り畳まれるように粉々になり、晴信の身体は消えてしまった。

「は！」

藍は自分に降りていた倭の女王と楓、そして椿が光に包まれ、晴信の魂を誘うように天へと昇って行くのを見た。

「おお……」

仁斎と泉進もその光景を目の当たりにしていた。

（何と神々しい……）

仁斎は柄にもなく目を潤ませていた。そして、隣の泉進に気づかれないように顔を背ける。

（これでようやくあの社も役目を終えたな）

「ありがとうございます」

藍は晴信を導いて行く倭の女王、そして楓と椿に向けて、柏手を打った。やがて光は空高く舞い上がり、見えなくなった。

「凄いな……」

気を失ったままの本多晴子を気遣いながら、剣志郎は光が消えて行った方を見上げていた。

「雅」

藍のその声で、剣志郎は急に現実に取り戻される。彼はギクツとして藍の方を見た。藍は当然の事ながら、雅を見ていた。

「貴方も、いつかはあぁなってしまうの？」

藍は涙を流しながら雅に近づいた。雅は藍を見て、

「俺はまだそこまで長生きはしていないから、あんな風にはならない。だが、妖気を全て捨て、黄泉路古神道を捨て去れば、死ぬ時は土くれのように崩れ落ちて消えるだろうな」

「そんな！」

藍は走り出し、雅にすがりついた。剣志郎はその光景を見ていられなくなり、晴子を見た。

「その子は大丈夫だ。妖気を吸わされてはいたが、それほど長い時間ではないからな」

泉進は、剣志郎の思いを察して、彼に話を合わせているのだ。

「そう、ですか」

剣志郎は苦笑いをした。しかし、晴子が普通に生きて行けるのを知って、ホッとしたのも確かだった。

「但し、人を殺めてしまった事は、その子の記憶に残っている。それは、その子自身が乗り越えるしかないのだ」

「ええ？」

剣志郎はその現実を知り、驚愕した。

（警官を殺してしまった事を認識しているのか？ そんな……）

「何より辛いのは、例えそれを誰に言おうと、決して信じてもらえないし、罪にも問われないという事だ」

剣志郎は晴子を見た。

（この子はそれだけの事を堪えられるのか？）

雅と藍のやり取りも続いていた。

「私にできる事はないの？」

藍は潤んだ瞳で雅を見上げた。雅はそつと藍を押し戻し、

「残念ながら何もない」

と告げる。藍はそれでも、

「そんな簡単に言わないでよ。少しは考えてよ、雅！」
と駄々っ子のような事を言った。しかし、雅は、

「考えたところで、言う事は一緒だ。何も手立てはない」

藍は啞然としてしまう。雅はスツと藍から身を引き、

「だから、もう俺の事は忘れろ。お前の思いに答える事はできない」と言うと、スーッと根の堅州国^{ねかたすくに}に消えてしまった。

「雅……」

藍はその場にしゃがみ込み、涙を流した。仁斎は藍にかける言葉を思いつけず、只黙って彼女を見ていた。

こうして、明治以来続いていた因縁は終わりを告げた。

晴子は病院に入院し、精密検査を受けた。当然の事ながら、彼女には異常は見当たらなかった。

「私はどうすればいいんですか？」

数日後、晴子は見舞いに訪れた藍と泉進に尋ねた。泉進は、

「儂のところに来るか？　もうすぐ冬休みだから、修行をして奇麗さっぱりするのがいいぞ」

と提案した。晴子はどう答えたらいいのかわからず、藍を見た。

「そうしなさい、本多さん。貴方の記憶から、嫌な事を全て消す事はできないけど、泉進様と行を積みめば、何か見えて来るかも知れないわ」

藍は微笑んで言った。晴子は小さく頷き、

「先生がそう言うなら……」

と言った。そして、何故か頬を染め、

「本当は小野先生にも来て欲しいんですけど……」

「ええ？」

藍は晴子のそのリアクションにギクツとした。

（まさか、本多さん、本当に女性が好きなの？）

また、剣志郎は驚きの話を聞かされていた。

「武光先生が？」

彼は理事長室に呼ばれていた。最初は、藍との事を訊かれるのかと思った剣志郎だったが、安本理事長の話は、武光麻弥が今年いっぱいで教職を辞めるというものだった。

「武光先生は、夏頃からずっと、職を辞したいと言っていた。決し

て、君と小野先生の事を気に病んでではない事は承知しておいてくれ」

理事長の傍らに立つ事務長の原田が言い添えた。

「そ、そうですか」

剣志郎は、そう言われても素直に喜べない。

（結局は、優柔不断な俺のせいのような気がする……）

すると原田がニヤリとして、

「どうしたね、竜神先生？ 小野先生との事を訊かれると思っていたのかね？」

と突っ込んで来た。剣志郎は隠すのは無理だと判断し、

「はい」

「君にそんな度胸があるなら、武光先生と付き合ったりはしなかったと思うから、訊く必要なしと判断したんだよ」

原田事務長は嬉しそうに言う。剣志郎は溜息交じりに、

「そ、そうですか」

と応じた。安本理事長はクスクス笑っていたが、

「とにかく、受験生にはもう時間がない。これからよろしく頼みますよ、竜神先生」

「はい！」

剣志郎は背筋を伸ばして返事をした。

放課後になり、晴子が入院している病院から戻った藍がバイクを停めて、教職員専用の玄関に歩き出した時である。

「藍」

不意に剣志郎が玄関から飛び出して来て、藍の前に現れた。

「どうしたの、剣志郎？」

藍は剣志郎が真剣な表情なので、ドキッとして尋ねた。剣志郎は周囲を見渡して誰もいないのを確認してから、

「この前、俺が入院していた時に、お前に言った事の返事、まだ聞いていなかった。聞かせてくれ」

と一気に言い切った。藍は更にドキツとした。

「へ、返事？」

彼女は剣志郎を見上げ、尋ね返す。

「そうだよ。返事だよ」

剣志郎は、本当は心臓がパンクしそうなくらいなのだが、原田事務長に、

「押して押して押し捲らないと、小野先生は答えてくれないぞ」

と言われているので、いつもより踏ん張っていた。彼は藍に、

「俺はずっと藍の事が好きだった」

と白面しらふで初めて言ったのだ。その答えを訊こうとしているのである。

「私は……」

藍はグツと詰め寄って来る剣志郎に後退あとずさりしながら、

「私は？」

剣志郎が全然普段と様子が違うので、藍は覚悟を決めた。

（剣志郎が真剣なんだもの、私が逃げるのは許されない）

藍は剣志郎を真っすぐに見た。そして一度深呼吸をしてから、

「九州の病院での事、あれ、その場の雰囲気きふきに吞まれた訳じゃないわ。貴方となら、そうなのでもいいって思ったからよ」

それでも、

「私も貴方が好き」

とは言えない。それでも剣志郎は仰天していた。あの時、由加達が入って来なければ、二人は間違いなくキスをしていた。

（あ、あの時も藍は俺の事を……）

あの出来事以降、二人の関係は全く進展しなかったので、剣志郎は自分の独り相撲だと思っていたのだ。

「貴方の方こそ、武光先生に未練があるんじゃないでしょうね？」

藍が剣志郎の顔を覗き込む。

「な、ないよ。断じてない！」

「酷い男ね」

藍はニヤツとして言う。

「あ、いや、その……」

剣志郎はドギマギして頭を掻く。すると藍は、

「でも、もう少し時間を頂戴。気持ちを整理したいから」

と真顔になって言うと、そのまま玄関へと歩みを進め、仮校舎の中に消えた。

「時間、か」

剣志郎は藍が歩き去った玄関をしばらく見ていたが、

「そうだな。何年も待ったんだ。まだ待てるさ」

と独り言のように言うと、駐車場へと歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9890s/>

ヒメミコ伝 鬼の復活

2011年9月17日03時30分発行